柳亭叢書全部總目錄

第一輯　○應報覺ての夢　全十五回讀切
　　○松襲操の色　第一回より五回迄

第二輯　○松襲後篇　第六回讀切
　　○一舍時雨の笠森　第一回より十六回迄

第三輯　○時雨の笠森後篇　第十七回より廿回讀切
　　○倚岸夜半の白波　第一回より七回迄

第四輯　○夜半の白波後篇　第八回より十回讀切
　　○唐紅噂之杜鵑花　第一回より十三回迄

第五輯　○噂之杜鵑花後篇　第十四回より廿回讀切
　　○袖ヶ浦餘波大潮　全十回讀切

柳亭叢書第四輯

○倚岸夜半の白浪　流泥

第八回　東都　柳亭種彦著

玄の渕過て三味線の音も靜まりし山本の二階を下て市原鬼三い弱めく足を踏しめ〳〵厠へ行んと椽端づさひ來る此方の一室より清吉いお園の手をとり歸らんとする出會がしら に思いも面を見合して「市原さんか「お園かと互ひに驚をかけ合ば清吉い眉と探め鬼三が顏を確と見て「足下い如何やら見覺の「已も何處でゝ見識さやうだが「オ、思ひ出せば先達て下總國吉岡の原で强盜に出會たとき通りかゝつて路用と下着を惠まをた和尚さま何の間にやら此お体い「イヤ〳〵會たい今日ゞ始めて人違への麁忽おことを大きお聲でいふものでいない跡で容子のヒかることだ何は兎もあを名乘らずともお園の間夫と見えるうふうに耳人の清吉殿初めてお目に懸つた即に一盃といふところおをゞ午後うふ〜て飲倦さ此山本も興がおい是からすつと氣を變て閑靜とした洲崎の社内で鼎足の小酒盛で知己にもなりおられもしたらへ過去話もしやうかゝに迷惑でいあらふけれゞ辨天までい何にも云ずお己と一所おサアに座れお園も直にと勸められ辭まれもせず清吉い腰を屈め手を揉で「お察しの

通り吾輩ハ金井屋の裏手清吉お園が是まで段々とあつかひお世話にありましたお謝詞も山々
申上さし「オット此處でハ何にも云ず後に〳〵と話しをうち消し藝者太皷ゑ暇をとらせ氣ゑ入の船頭小介を僅に一個従へて清吉お園の先ゑ立八幡の華表をくゝり三十三間堂邊へ來かゝる時に提燈を持たる小介を呼近づけ耳ゑ口よせ何事やら囁き示せバ心得て小介ハ持たる提燈吹消し一散走りに今來る仲町の方へ立戻りぬ鬼三ハ酔て正体あらまで一歩進めバ二歩退き思ひの外に

時をうつして洲崎の社前へ至りし頃ハ丑三ツ近く成ければさしも賑ふ茶屋々々の點燈も消て打寄る浪音高く蘆を吹く風寂寥しき四邊の景色を鬼三ハ見つゝ立止り「折角一杯上やうと思つてわざ〳〵御夫婦を誘引出したが更たもゑ茶屋ハ殘らず仕舞つたやうずア、殘念ゑ事であつた「お近付の酒宴ゑら今宵ゑ限つた事でもゑしナフお園「夜更に斯ゑ怖いところにゐるのハ氣味が悪いもゑ酒ハ翌日の事にして「思ひがけなく夫婦と成ゑ御恩に成さお詞ばかりを「立てゝいふも失禮ゑがら「ゑその禮ハ無用〳〵斯う化の皮が顯れうけてハ最ふ左や右どハ口説かねェから清吉どんと故の通り夫婦ゑ成て今夜かゝ已が手下に附てくりやき「エ、手下とハ「ム、其不審ハ尤も〳〵市原鬼三といふハ假の名實は上總の博徒かゝ身を持崩して巧者經ア翁間の銀治といふ海賊ゑが追捕が廻つて水更津から脱る船場へ網を張れ苦しハ智恵の底を揮つて山寺へ多勢で押入り住寺が所持の袈裟衣若

徒手廻り中間の服装から駕なで盗むで首尾よく坊主に化殺せ手下の奴を先に立小道取をさせあがゝ甲府へ出ゝける途中にて獨旅の町人を刺とつた跡へ通りかゝり聖僧らしく見せかけて下箱と金を惠むざい身の惡業を知られぬさめ夫から暫く甲府へ身を避け此ほど漸と立戻り此深川へ遊びゝ來る夜道ゝ通る万年橋で計らぎ貴方のお医儀がドンブリやらかす所を助け賓家へ送る降々も見れば見る程と美しいお園の縹致に惚こむで主ある花と知りおがら一枝手折る氣に成たが清吉どんを連剣せた報いゝ回つて化の皮を貴方が剥れた運の鍔陽どうぞ此儘見通しても他言いは無用と託やうよりも想ひあゝ二人と其儘そひ寝させ野暮を田舍の住居でも貧ゝ富ゝ不自由なく活計させやうから手下ゝ成て板子一枚下ゝ地獄の住居をしろと大恩を明て頼まふ爲に街を離れた此濱迄へ誘引出したゝ我が計略モッ百年目とあきらめて夫婦とも〳〵手下ゝ附か「偖こそ怪しい爲体だと思ふゝ逆ゝぬ海賊渡世道にかけたる同類に「あるゝ否おゝ市原鬼三ゝ大盗八ざと訴人ゝ出る氣か「看護が衣服ゝ剥れても女房お園を救ゝをた大恩のある此方もゝ「怨を捨て黙ゝ這入お「サアろれゝお「忌か「サア「應か「サア「サア〳〵と問詰つ、足元にある小石を拾ひ蓋の茂みへ投入れる礫は兼ての合圖にや先刻途中で別をたる船頭小介と今一人の手下は小銃を携へて蓋を押分け現れ出清吉夫婦と取園を火蓋を切んと身構へたり

第九回

清吉お園ゝ思ひがけなき虎穴ゝ陷ちたるに驚き身も戦慄かれ動き得ざるを鬼三ゝ尻目ゝ見やりつゝ「思ひ合ふたる夫婦中も命と云ものがあれゝこそ諸白髪の末までも愛度そひ遂られるれども聖人めかして己が頼みを否とぬかせばモウ是まで大事を知られた二人とも其儘に帰せぬもゝ船頭と偽つて連歩行く手下の奴等を蓋間ゝ伏て一張の烟の下ゝ撃とる魔期度胸をさだめて返答しろ「成ほど浮世と渡るにゝ樂に暮すも苦しひも同じ人間「生あれゝ金銭に不自由のないを取得に今日から貴君の手下に成ませう「ユ、おまへゝ本氣で鬼三さんに「正氣でゝくて何とせう算盤とつて旦暮お口やかましい義母の機嫌をとるより寧のこと何の苦勞も波の上へ住居をうつして市原さんの萬事をお世話に成積りさ「オ、それ聞て安心した小介大八モウよい〳〵此處へ來やれト呼近づけ「譏へ通りに此二人が今日から手下お成といふから已ゝ小介を供お連て其邊で一盃やつたらへ直に船へ乘込から大八ゝは若勞

あがら跡へのこつて此衆の見え隠れに附添て何かの用を達させたうへ身支度が整ひ次第荷でもかついで翌日の夜までに時刻を計て乗込がよし清吉どんにお園と一所に何かの支度もあらふから行先を此男に話し持込む荷でもあるならば遠慮なく棚がせるがよい船い永代橋の下に幾らも投錨てある中にすつと東の岸へ寄た市三船と尋ねてござれ市原の市の字と鬼三の三を忘れまいぞ餘の話しい綏々と翌日の夜船で来ませうと三人を追立やる跡を小介に見送りて「巨魁い如何いふ了簡で荒働きの出來やうもねエ生白いあの野郎と大骨折で手下に附たは何か目的のある事うね「汝も野暮をいふ奴だ一端己が想ひをかけたアノお園めい操と守り一筋縄では行ねエ奴ゆゑ野郎を此場で暴殺せば猶ふ事を聞ぬは必定そこで二人を従容と黨になれと引入て手馴たところで先へ寄り稼ぎに出して清吉を途中で片付けさへして来まへばお園い有無あく手生の花だ何と皆んなかくと說誘つゝ悠々と石場の方へ去る清吉お園は酔たる如く鬼三ふ別れぶ來るともおく高橋邊まで來りしころ廿五日の片割月い漸く高くさゝ昇り四邊も寂寥く成ければ大八は進とより「大ぶん更たやうもだが此方達い是からして何處へ向けて出かけるのだへ「今日から黨に成たをば何所へゆくとゝふ

所もおいが此お園が實の母が原庭に居まもから夫へ參つて余所あがゝ眼色をして來るつもり「巨魁も翌日の夜出帆する仕組のやうすあれば江戸の名残に已は是から新石場へ引かへして一餘秋まやれて明日本所へ二人を迎ひに行やぜう〻原庭い何處らの所だエ「表町から北へ通入る東淸寺といふ寺がある其門から六軒目で人任寄をする婆さんのお竹といふがお園の母「そんなら翌日の正午までに迎ひゝ行から

待て下せエ「名題とあらバ去つわうと樂びでおいでゐさいと剛れて背後を見送りつゝ影だゑ見えず成ればホッと一息胸撫おろし「アヽ恐ろしい怖わつた彼大八が附てゐるので話しもろくゝせずに來たが困つゑ破滅ゑ陷つたあア「おまへゝ如何ゑ了簡で手下に附ふ翌日中ゑ必ず船へ行ませうと安受合をしたのやら如何ゑ彼奴が怖いとて「あの場合で彼是いへばドンと一發放つゑ最期夫婦が命のあいとところから一過遁れに承知はしたが盗人馴ぬ清吉と手下に買ひ道理はあいうちゑ園を旨く手に入るため二人と船へ乘こませ沖中へ出た時分に已ざけドブリと生おがら氷詰にする所存であらうが故の命を助けられた大恩もあるうへゑれバゑまじいに脱かくれゑらどんゑ樂とするかも知ゑずよし又妙ゑ策があつて此鍋ひゝ脱れても鬼々しい義母の爲に夫婦が一所にゐられぬ難儀左ても右ても清吉が身の際と諦めて已ゝ獨で死ぬほどに汝ゝ婦人の事なれバ遁ても厳しい目にゝ遭まいうして腹ゑゐる兒どもに無事で日の目を見せてくゑ、バ已も未來で喜ゑと男涙ゑくれければ「明しい間のあいこ人の苦勞てんゑ難儀をしやうより寧の事に夫婦とも死より他に詮方ゝなんに獨で死とゝ聞ゑぬ言葉おまへばかりゑ死た後でゝ家の活計も行立ず仲町の負債は殖る妊娠ゑ躰で如何ゑゑう生て苦勞とそるよりも親子三人手をとつて未來で樂をしませうと啣ち歎けバ清吉ゝ涙を拂ひ獣頭て「然う了簡を定めゑゑす刻も早くと思へども生憎こゝにゝ刃物もゑゝ往來へ死骸を晒すも恥ゑしいわけなけバ僥倖に今懐中ゑ十兩足ずの金があるかゑ原庭の姑獲の所へ行て金を惠み余所ゑゐら暇乞をして偽つて近所まで使ひを頼ひで出しゑ跡で忍靜かに死遂やう「成ほど是いよい分べつ死るいまゝの際までも母にお金を惠まうと思つて下さるお心ゝ嬉ゝいとも離有いとも詞に盡せぬお禮ゝ未來で「かへゑぬ歎きに時を移し遇く成てゝ何ゑに不都合夜明ぬうちゑ原庭へ「サア行ませうと共俱に無常の風に誘引れて命を獨出す八幡鐘にきぬゝゑぬ今世の名殘と惜む涙ゝ深川の深き歎きに沈みつゝ原庭さして急ぎもく

○第十回

悔しともいひてくひるき先の世を今の契に嘆きそへ身ゝ朝露と消もけど後の浮名ゝ消やゑで笑ひの種と業平の古跡ゝ近き原庭にまゞ若草の妻も兒も籠るといふゝ盗人が余所の娘をぬれきたる伊勢物語の古事なゑでお園ゝ計らず盗人に思ゝれしうへ姑ゑ疎まる、身の置ど

ころ内證の事あれこれと思ひ迫りし心中い親の免さぬ私通りまたい遊女に有ものを夫婦ぐの手よ手鳥邊山死よもく身の夕烟これい本所の朝烟立のぼるころ漸々と我家近く來りつゝ内わ入んとするお園の袖引とめて清吉が「母御の所へ落着て疊のうへで死ぬ氣であつさが狹い住居を血ざらけにして淺猿しい姿と見せ一層歎さをかけやうよりい持合せた此金と戸の隙間から投込で吾妻の森か木下川邊の人通りの少あい所で刃物を持ねば帶を解縊て死でーまはういエ「母さんわ會たあら却て未練をあらふから遠い田舍を死ざあら何處の者とも名も知れや來くの人にも見られねば罪ふをたま上を人相書を出されるまを淺猿しい死体を母さんよい見せぬが上策「然う氣がついたら一刻も早く急いで行うと懷中より取出したる金入を母が起出ぬ其ひまにと雨戸の透へ入んとする折から内より戸を開て立出る一個の男が二人を見つゝ大きに怪しと「まだ薄暗い黎明に奇麗な藝妓と二人づれ取亂した景狀で何やら内へ投込い何處の者ざと咎ひれどお園い見知らぬ人あをば「おまへい何處の人ゝい知らねど吾儕い此家の娘にて藝者をしてゐるお園とんふもの外のかゝりも内の容子もとんと聞らぬ此家に母さんい居ず見馴ぬおまへが獨居るとい如何しさはけと詰るを聞て小膝をうち

「成はど是い合點が行まい此、家の母子の話しに聞たお園さんといおまへの事かへ已い武州に名の高い非の頭の辨藏といふ博徒の逸民ざが此ごろ上總の木更津わ大きあ賭場を開くわ付て久し振での江戸見物がてら此原庭の知己の許に暫く泊つてゐるうちに腐着の汚をや衣服の綻びと貧仕事といふ目標の出てゐる故に度々顧をお母さんと懇意に成て此處を旅宿も同前わ且暮話しわ來るうちゝ昨夜い何だか錢草の妹の處へ用があつて急に行ねばあらねども夜更て一人い歸られねエから泊つて留守居をしてくれと頼まれて易受合ひに何商賣もあい氣樂さ宵から少ぐつすり睡こひざ故か珍らしく早く目が覺てモウ起やうかゝと明るを待てゐる外わ密々話を男と女が死に出かける相談い嘘途方もねエ無分別如何ありとして止やうと出て見れば此處の娘子お園さんであつたかエお目わ懸るい初めてだが連のお人い御貝夫の清吉さんとやらであらうが能々思ひ迫ればこそ死といふ氣が出るもの、誰にゝ相談して見れば皆死ずとも治まる騷ぎ如何いふ仔細か知らねエが已わ話して聞せて下せエ道に外まさ事さへせにやア決して死よい及ばねエ博徒こそしてゐをを曲つさ事い嫌ゐあ辨藏相談相手にも成やせう兼い紫顎の其うちにい隨分悪い奴も有るが是も上總で懇意わ成た大瀧の

定とん奴い上総で有名の悪漢の菊間の銀治が麾上にあり此ごろ江戸に潜れてゐて清吉さんの御舘へ押込み母御わ疵を負せるとやらで一昨日御縄にかゝつたさうゞが思ひがけない敵計が讐で嘸かし清吉さんい能い心持でありましゝうと始めて聞て大に驚き「フム偖い養母へ傷を負た盗人もアノ市原鬼三本名菊間の銀治めが麾下の所業であつたのわ斯まで彼奴ゞ禍ひをされてゐるとい嘸しゝず女房の命と助

けられた恩に感じて手向ひもせず死ぬふとしゝい我あがら餘り意口地のわい話し養母も重傷でむつゝしげれバ鬼三い正しく親の讐女房の恩ゝいゝへられねバ是より直に訴人に出て同類一統縛につかせお園にも安心させうと急に心をとり直し今までの一伍一什を辨藏に物語れバ「アノ銀治めが鬼三と名を變へ江戸に潜伏てゐましたかエお園さんを助けたのい深切づくバうでいゐく有心故造の事ゐをバ恩ゝ着るべき所い寡く母の讐い大事ゐれい一刻も早く訴認して危い罪い脱きるがよい此家の母御の歸るまでお園さんい此辨藏が預かつて忍バせて置バ衆くの手下が迎ひゝ來ても己が命のわゝ限い決して渡を事でいない跡の所い氣遣いず彼奴等の眼にゝらぬやう町奉行所へ疾く〳〵とせり立られて尻端とり「何分ふたのみ申ます」と中を飛で奉行所に至り永代橋の下に殺錨し市三船の持主こそ兼て官にも探索中ゐる海賊菊間の銀治ゐるが其同類の捕とし に怖を今夜手下を四五人引連を出帆をる趣きとお園に懸想しれるを以て強て手下に付られしより死んとしゝる始め終りを逐一官吏に訴へけれバ直地ゝ同心數名を馳せ手分を定めて銀治を始め大八小介其他の賊を一同に捕へ紀彈のうへそれ〳〵の重き刑に處せられし後ゝ清吉い強盗を訴認したる廉を以て神妙

ありとの褒詞を賜はりお園も憂ひを忘れければ男子を安産したりしころ義母お廣い賊に受たる重傷の療用叶いも遂に空しく成ければ父金右衛門い素より心善き者なれば直地にお園をよびむかへ清吉に添ゑめ家事を任せば甥三平も大よ喜び通ひ務めの身と成てお園が母の貧を憐み金井屋の近邊へ引とり親族一同むつましく追々よ富榮なしと聞く四十余年の昔日語も此編に筆を閣くことしかり

記者曰この挿畫よい銀治が天網よかゝる所を見せて本文には略けり看客怪しゑずして其飯きを推し賜へ　一

（夜半の白涙畢）

遠からん物語い音羽の遊所に聞かん近い夜も物淋き星宿の名所の廢

唐紅噂の杜鵑花

第一回

幕府の權威燦んなりし頃い薄祿の小吏と雖も御直參と自ら任じ江戸市街に跋扈をるを世俗に安御家人と唱へ品行の善らざると甚だしきに至りてい内職と稱して博徒と交り一刀をも佩ずず半纏三尺帶の卑賤なる風俗を好き落魄戸と一般に遊所を横行をる弊風あり〳〵中よ御本丸御賄頭明樂八五郎組の陸尺にて祿高二十俵二人扶持を賜ひ代々音羽町二丁目の拜領地に住ふ新粂平太夫といふ者あり此平太夫ゑ三人の子ありて長男を德次郎次男を金十郎三男を松五郎といふ德次郎い長男なれど故あつて夙く他姓を犯し井本氏の嗣子となり次男金十郎を以て新粂の嗣子と〳〵見習奉公を勤めて別に都屋住の高十五俵一人半扶持を賜ふ三男松五郎い町家何某の養子と成て實の父兄の許に同居す然〳〵て後に平太夫い病て身まかりければ厚ひの如く家督相續せし金十郎い性來放逸無頼にして有名の博徒と交はり偶然勝利を得る時い酒色の爲に忽地散じ任侠の風あるを以て俠放勘家の黨派

よてい金十郎と呼ぶ者あく音羽の銀坊と異名されしい金十郎が幼名を銀之助といひ〳〵故ありしとぞ

○第二回

當時御本丸表坊主の小普請にて博徒の巨魁と仰がるゝ河内山宗春が股肱の乾兒と呼れたる鎌助といへるハ城中間の悪漢にて淺草見附（今の淺草橋）より北ハ軒者境内吉原まで一軒たりとも鎌助に脅迫されて多少ゝ寄す錢を取れば商家もなけ※ぬ人もなきをあゝ眼水戸の分家にて小石川御門外なる松平讃岐守（讃州高松の城主溜間詰）が中屋敷の中間部屋ゝ賭場をひらきしそのをりゝら金十郎ハ鎌助と聊の爭論より次第につのる互ひの高聲中裁人の詞もきちひゞ「此場に居合す大哥等の面ゝ對して默止てゐてエが相手ハ名に負ふ坊主衆の河内山の乾兒だと大きて出られて閉口ぢやア此方も同じ御家人で面を知られた者羽の銀坊扶持方棒（両刀の事を云）ゝ對しても此場ハ毫も引をねエと尻を端折て立掛れば「何聞た風ゐな家人呼ハり鬼神が鎧を着て押て來たとて愕ともしねエと此鎌助が些相手にハ不足もごら望むぞ仕掛る喧嘩を買にやア河内山の外聞ゝまで關係る事

※れば皆五月蠅ゝ神の如く渠をおそれ

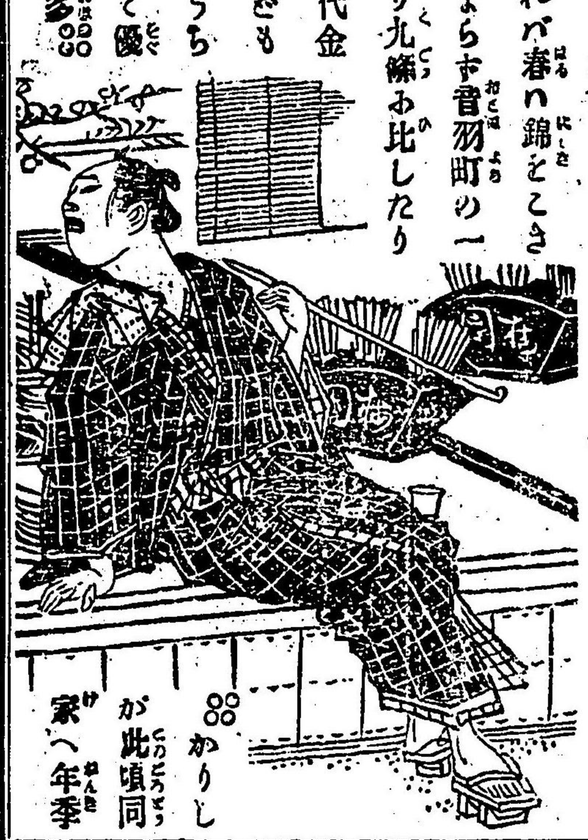
も忘れて置ねエサア尋常に立上り此邸の門を出て奴を殺すか此方が死ろ「コリヤ面白い命の遣取如何もる者かと角芽立を賭場に列ゐる巨魁等が左右を睿めて程よく扱ひ彼所這所と奔走して漸くに咄を纏め新柳橋の貸坐敷大熨斗（今の万八樓）にて仲直りのとき河内山ハ鎌助が親分ゐれば小襖の上ゝ黒縮緬の羽織と着飾り二階の廣間の中央ゝ座し「貴公が音羽の銀坊かゐハ聞てゐるが會ハ始めて若エに似合ぬい丈夫ゞ所う心易く成うへハ是から互ひに宿意ゐく「何ぞの折にハ親昵に成たく思つゝ河内山以來ハ如何ぞ睦まじくと互ひに讓る言の葉ゐ涙△

△風立ず採る盃を指ハ鎌助初めとして名高き

片岡直次郎其他居合す双方の乾兒が二度よナヨン〳〵と祝ふ手拍子打くつろぎ目出度開きし其後い金十郎も宗春も折々往來い〳〵たれども金十郎い賭博の外に不良の所業いあさいりけり（河内山が事此下に話あし）

○第三回

西京の侍室わ似たりといふ江戸音羽ある神齢山護國寺い密淋最大の梵宇わして元祿の頃藥園の地を開墾ゑ多くの花木を植付たれば春い錦をこき交て青柳町櫻木町の名あり然のそならず音羽町の一丁よりして九町あるい京都の一條より九條わ比したり其八丁目九丁目ゑ獸飾の遊女屋（揚代金貳朱店）數軒あり此い之陰賣女あれども大店と稱するもの七軒局店廿一軒のうちに甲子屋と稱するい大店中の上等にく優れて繁昌するにつけ娼妓も美貌もの多〇〇かりしが此頃同家へ年季



とるく僅の間の出稼ゑ來りしお作といふ婦人い湯島天神社内ゑて梅園といふ楊弓店の娘ありしゑ本郷邊の落破戸ゑ御名と豆長と云ふ者と深く契りて夫婦約束まで〳〵るが豆長い一日梅園の店に立寄「今朝い大そう寐坊をしたな今ゑた上野の巳刻を撞たる店飾りもしねへのう」「寐忘れたのでいあいけれども斯ゑに暴く雨ゑ降から如何せお客もおからふと遂無性を去て〇〇しまい度が嬶々貴嬢い己が爲に音羽の女郎ゑ成る積か「成たい事もおいけども實い吾儕もおまへ故ゑ質種までもあく〳〵た舉句如何ありとして醫のやうに立直さふと彼許這飾の大附（大附といい當時官許の富の賣り札を目安にして小札を賣て賭事をする是を陰富と云）へ手を出して見たが悪い時ゑい悪い者で大目を買ゑ小目が出る總てが貧目の齟齬で法の附あい貧乏世帶と持る所がおまへも吾儕も少しい面も賣た者が哀れゑ襤褸と引摺て遣てゑ處が諧

〇〇遇く出たのさ「客のおい間先達て相談しかけさ一件を纏めた咄に去て

らないうら儘の間泥水も飲で少しい身の振方を付て來やうと思ふのさ「實に然でもして吳あるやア已も差向今月末にと十か二十といふ金が是非あくつてい成ねへから長い間の事でいあし如何ぞ辛棒してくんあよ併し音羽へ行さらば楊弓場どい事ゴ變つて毎晩異る客の中にい惚る男も嘸あるだらふ「何だエ長さん奸計らしい來ゴ勤にゐ出あいうちから取越苦勞も程があるよと捐たゞ炬管で膝を叩けバ「ヨ、痛いハエ馬鹿あれるあよ「そんあら本に身に染た相談をしてお呉あチエと是より相談整ひてお作い音羽の甲子屋へ勤めに出さる其日より湯幅で顔を賣たゞけ最自の客の集ひ來て晝夜に玉の數多く二階中にて羅一の花走妓と成しより遂ふ新粉金十郎と深き契りを結びゝい櫻木町に夜嵐の音羽を盛らす基なりかゝ

○第四回

日に源姓を送り夕に平族を迎ふる遊女の身の傲ひとて異る枕の數々ゑお作はいつゝか豆長ゑ盡す心も奈良坂や兒手柏に秋の來て深く染りゝ情人い賭博黨の巨魁もゐ勝利ときい分外に時散ゝたる銀坊が今日も閑寂な春雨に寐忘た儘居續の朝餐と書餐とを兼帶に丁廚の賭の上へ重陶器に下物の數々並べて酒を飲あがら「是でい何ざか飯の菜が事足ねへで淋しいが

如何に雨ゲ降からとて河岸の歸りが遲過るぜ最う何家でかい出來るぞらゑ子髮を遣て何が來たか附木へ書て貰らつて來なせへ「ろんなゑ豆どん大急ぎで蹇屋へ行て來ておくゑ我儕の傘を貸てやるから泥然歩行て轉びあさんあ序ゑ半紙と三帖と漉油も切てゐた是で殘錢を取て來あど莨盆の曳出しより一分金を拋出せゲ「アイ〳〵早く行て來ませと廊下ばた〳〵急き行跡見おくりて金十郎が黄色い金で小買物をする勢ひい剛氣あ者だ大ぶん面工が滿だと見ゐるあ「イエ〳〵如何してろれゞころかへゐとゞくるしい其あかを彼の豆長が三日にあげず來てい二分貸せ一兩かせと去年の暮らせめられるので實に明しい間いあいから前夜い悶遣に骨牌をして久

し振で黄色いお金の面を見さのも通り抜さ「それついとんさ細屋敷だが豆長の爲に身を沈めた汝ゞ今更五月蠅といはれた義理でも有めへゞ「イエ〳〵實わ長さんが斯な意九字のお い人とい思いおんかゝ買冠つて一旦い惚もしたが今でい眞に愛想が尽て我儕いおまへに見換さ証據是見ておくれと雪さへ恥る腕を捲つて突出せば「フム一応命銀印と此刺字をしたからい頃日からの詞ゝ違いを「仮令一日一晩でも是非女房にありたいと思つてねをとおさへも吾儕も蠶中は知れた中何方へか連て脱ておくれお「受出すおんどいふ金が出來る目途い一向ねへゞ爾々汝ゞ其氣あら已も君羽の銀坊だ汝の體を表向き引拂つて借て行ふよ「借て行とい如何するのゞへ「如何しもしねへ横行に已が自宅へ引摺込のさそれれ「餘り度胸がいゝねえ「此銀坊が連出せば誰に指でもさゝせるものか「本とうよ然う行さへれば寔に嬉しい話しだけれども「ハテ行おくつて如何する者か細工はりうゝ仕上を見おせエ「大きお聲をおしでおい此一件が他へ漏ると邪魔が這入て面倒だから「面倒竟が邪魔に成と明番締りじやアあるめいし

○第五回

銀坊の金十郎は未だ廿六の壯年あれば前後の考へとてもおくば家人衆と敬さはれ賭博の巨魁と仰がるゝ勇威と憑みてお作を連出し程遠からぬ我家に留置き幾日經ても歸さねば甲子屋よりい種々に掛合ふ者の其實はは免の遊所ははらぬ隠賣女の事なれば表立てい嚴しく掛合兼たる所へ附込み相對づくで連出したる女を强て戻せとおら恐れ多くも既府の裁判を仰ぎしうへ返す理あらゞ返しもせんとて聊たりとも取合ねゞ甲子屋にてい大きよ驚き如何ゐそべきと評議の最中お作が真人同樣ありし本郷の豆長い此一件を疾くも聞知りお作ゞ心の變りたるを妬み且銀坊が所業を憎み憤懣に堪ざりしが再び思案を廻らせゞ一端變心せし女の尾に慕ふて左お右いふも餘り出來たる事おらねバお作い此儲思ひ切り預け置たる甲子屋へ難事と言かけて金にするこそ上策おらめと其日よりーて内證へ誘き主人に會て言を正し「一生身を賣たのでも無く暫時預けた女房お作を主人の一已で私擅お他の客人へ貸てやつたい放蕩家で江湖上に少ーい面も知ふ

れたる此豆長の顔を潰して恥とかゝせる了簡か左もあいな
ふゝ即刻お作を連て來さへすをゞ前借金
ゝ耳を揃へ女の體と引換に連て行ふと金
十郎が歸さぬといふ事を曷り寐込で毫も
動かねゞ「否さお返しヤさぬといふ理で
ゝあけれども相手が有名の惡御家人なる
掛合中に彼の是のと手間取つて延引した
が近日示談も緩まふふかふ今日の所は先
之で一盃飲で歸つて下せエ如何でもお作を取戻さねゞ餘所の客への示しに成ねゞ專ら嚴し
い掛合最中まづ夫迄いと一二兩袂へ入て宥めつ賺しつ追返されるを好事とし三日にあげ
ず豆長が内證へ來ては高聲に騙つた末には三分か一兩貪り去ぬ事もあけれゞ甲子屋にてい
内外の計算上に差響けゞ如何はせんと思へども金十郎ゝゆ家人なり此方は元來默許の遊女
屋裁許を願ふ事あふねゞ何詮方も投遣わして置とさい豆長に屢々迫るゝ因じ果町内の者を

中へ入れ穏和方へ掛合ひを一層嚴しくさたりけり

○第六回

却説音羽の甲子屋にてはお作を店へ取戻さんと事ひつかしく掛合けをゞ流石女の心弱く如
何ゝせんと打案じ胸安からぬを思ひ惱むを金十郎ゝ慰めて「如何なゝ手強く談じゝ來たとて
音羽の店ゝ隱し置女で表向でゝ願ひ出されぬ所を着目ゝ金十郎が遣出した女あれゞ指でも
さゝせる者でとねへゞ併し斯して滝々と掛合てゝゝ日にと際限もない事だから此方の手強
い腕を見せて自今掛合わ來ねへやうに驚かせる策がゝるゝら堀の内へ參詣に今から已と一
所に行ねへ「堀の内へお參りに行といふのゝ法祖師樣の法利益で甲子屋から掛合に來ゝ
やうに法願を掛に行のかへ「日蓮樣が女郎屋の掛合除ゝゝ成ねへが堀の内へ行といふのゝ
汝を遣て甲子屋の前と平氣で通つたら逃隱れをするやうな手弱い奴等と類が違つて一ッハ
幕府の法威光も立ち二ッゝと多くの乾兒ゝ音羽の大哥と立らきる已が面のゝ、所を安女郎
屋の亭主を始め若い者の痴漢等ゝ見せ仕て遣たら迚も手出しゝ出來ねへと諦らめて此掛
合ゝ泣寐入ゝして去まふだらうよ「成ほど貫郎の面ならゞ其働さに膽を潰して返せ戻せの

一件を默つてゐまふかも知れぬいが何ぼ何でも脱走さ樓の前と貫郎と一所ゐ歩瓢ゐ顔で通るのい如何に鐵面皮でも間が悪いねへ「己の嗅になりゐがらが氣の弱いことといふものだ何も恐をるところいねへい僥倖弟の松五郎と食客の築藏が今日い閑暇で轉寐てゐるから四人づれで徐〳〵と今ら直ゑ出かけやうせ「ろんから一番度胴をするて一所に出かけて見やうかねモサ女湯が明たらふから吾儕い一風呂浴て來るよ「松五郎と築公が二階にゐるから呼でくんゐ出かける前に先一盃景氣をつけて行ふらト呼れて入來る松五郎と築藏い金十郎が計略の終始を聞「これつい成程面白ろいいへヤア何ゐーても飲ことだと各々支度をゐながらに小酒盃をゑはじめける

○第七回

「お春さんヤア一寸ぢ窺よ護國寺の霧嗚ゲ此嗅盛に成た故か朝から大さう人が出るねへ「夫ゑ今年い花の時分降通ーて花見の人がねつから出ゐいでゐまつたから葉櫻に成て客人の足も殖て忙がしいが眠いのゑは恐れるねエ「眠さいねぶいがお秋さんと一座で昨夜出た客人い初會でぢ家人らしいやうだが奇麗に金を遣ふところが花美で俠客ゐ所がゐるよ「お夏さんの惚つぷいのい毎もさまりで馬鹿〳〵しいよ「ゐ家人に惚るとれへばお作さんの一件い今だゑ方が附ゐんのうねへ「銀さんも中々お祟手で行く質じやアゐいかふ嘸摠合が面倒ざふふよ「オヤお春さん彼お見よ噂をそれゑ影とやら銀さんがお作さんを連てアレ〳〵此方へ來るよ「成程さうざね銀さんと松さんも一所だらうお作さんを内證へ返して詫ゐでも來たのざらふよイエ〳〵内證へ來るのでい有く何處へか他へ行やうすざよ「他へも〳〵ゐらのめ〳〵と此櫻の前いとはふれまいが「此体を見て樓主が何とも言ずにゐたざらふかヤア如何するか見てゐやうといふ間に近付金十郎とお作い二階の下に佇立「オヤお春さんお夏さん皆お揃つて大層早いね「銀さんと御夫婦連で朝ら何處へお出掛だへ「堀の内樣へ行のざが皆も一所にお出でゐんか「吾等もお前の樣に氣儘に外へ出ふれるるら直にも一所に行たいがお作さんい情夫に連られてお脱ざから身儘に成て羨ましんよ「餘所目い然かも知れゐいが儘のゐひざに世帶染て大層に更たらふね「イエ〳〵奇麗ゑお成ざよと二階と下で語合ふを金十郎は目くばせ〳〵て「餘り話が永く成と遠方の道を抱へて遲く成から早く行ゐ」お春さんやお秋さんも何處へか出たら遊びに來ゐせエ近日緩りと來やせうと四人連ゐて

悠々と此甲子屋の店前を通り過ぎる傍若無人の金十郎が挙動に朋輩娼妓い驚き呆れ互ひに目と目と見合て「厚皮しいお客がある連て逃た女郎衆ど是見よがしに鴛鴦行で大手を振て通るのを内證で何とも云ないのい御家人といふ肩書のある故でもあらふけれど斯いふ理あら吾等も御家人衆に色をこしらへ身儘に外を出歩行さ借力金を踏あいのい柔順だけ損といふもの「ソリヤお秋さんのいふ通り是で崇がまい君あら内證の旦那い瓦の腰抜なんでも是から精出して繁破戸と色をして遣て逃て貰ひませうと一婦がいへば一同が皆器々と喚立を制する由あら甲子屋の主人い頭を悩して太き息のみつきゐたり

○第八回

甲子樓の遊女等いお作が傍若無人なる所業を頻りに羨みて各不滿の色を顕はし常にい午前髪飾浴るんども して置べきを皆一同に寐ろべりて酒を飲み俚歌を哩ひ遊ふ勤わ怠るを道△

△手の舌の爛る抔置り懲せど空吹風ふ動く景色もあかりければ呵責わぐみて内證へ來り亭主に斯と訴へれば主人い眉ふ皺を寄せ「娼妓さちが不平てゐた騒ぎい疾から知つてゐるの娼妓ふ小言をいふよりい先差當て銀坊を如何にかして懲して見せずい此治い附まいから御供の七を呼で來

あト呼れて出て來る若い者い此甲子屋の食客にて人の氣を入る氣輕者也る客い更ふり同業中の亭主達にも愛らをて毎も諸方へ連らるれば御供の七と異名を呼を土地でい面の賣た男「時に旦那どんゞ寡が出來ましゞぢやァござりませんか今遇ヲ衆に聞ましゞら銀坊がお作さんを連て二階の女郎衆と平氣を話して行たとやら餘り人と白痴にしゞ斯お騒ぎを默つてねてい女郎衆の不平のも最も加之この後銀坊の乾兒の奴等も大哥ゞとか狸ゞとかの威光をば博徒が肩に若せあがつて如何おに威張ゞ知れませんから後日の爲の懲目に銀坊を捕獲て足も腰も立ぬほど半殺しにして遣おけりやァ君羽の名折よおりませうせ「己もさうといおもつてねるが一体君羽の遊女屋い表向でいおけをども二十七軒の亭主い殘らず八丁堀の手先(町同心の探偵方俗にオカヒキと云)を勸め官の通りも宜い理だかゞ少しの間違が有ても如何でも法がつく筈ゞから此軒並で重立た住吉屋の亭主を顧を夫から夫へ觸て貰つて大勢の人を集め今日の歸りを途中に待うけ野郎と女を引摺て來て朋輩女郎の見てゐる前で飽まで折檻してやつゞふ向後ともに薄禄小吏が惡戯た眞似いしめェうち午後から諸方へ手を分け二人を脱さぬやうにしやうせ「成程是い仰しやる通り落破戸退治をして置ずい增長がし

て制限があるめェ併し有名の銀坊だけ乾兒の邪魔が這入た日にい面倒だから陰密と手分どして立番床番飯焚までおの〳〵獲物と携へて這所彼所へと出る中に甲子屋い御供の七と六七名の者を從へ堀の内道の喉咽ある關口通りの樹の蔭に埋伏てお作と金十郎が來ると遲しと待構へぬ

○第九回

金十郎の一行い甲子屋が主趣晴ゝに衆くの者を路々に埋伏あせしを知らざれば其日の申下刻頃四人等〳〵微酔稍嫌に關口通りへ來懸れば物の蔭より動也〳〵と現れ出たる大勢が物をも言ず四人の者ふ討てかゝりて金十郎が手足を擒へ擒ぎ行と松五郎と榮蔵と力の限防ぐべき勢ひあるきにあらねども不意に起りし事あれば途を失ひて彼是と狼狽するうち金十郎とお作は何方へ行〳〵やら姿も見ねねば大きに驚き斯てい我等一個にて今甲子屋へ押懸るとも多勢に無勢をかあいねば一先家へ立戻り夥多の乾兒を募集めんと松五郎榮蔵い辛ふじて其場を脱れ道ある畑の間を走りて已が家にと歸けり却説甲子屋い御供の七と多勢の若者に

金十郎を手捕足捕引立させ店の内へ搗ぎ入れ大麻繩を以て堅く縛め身動あらぬやうにして中庭の樹に繋ぎ平日娼妓を折檻する手頃の棒を引提來つて「ヤイ金十郎面を上ろ汝も音羽でよい顔の銀坊といふ程あらば爲だけの事は行渡つて親方とか馬方とか立られるあふ格別だが未だ貸金のある婦を拐賣同様に引浚たのみならず平氣な面で是見よがしの店の前を通られてい此甲子屋の暖簾が廢らア其强談に驚いて默つてしまふ位でい游女屋渡世が出來る者か御頂戴でも御家人でも物を偷めば盜人の赤鰯あゞに威されス甘口おのでい無のざうゝ衆くの娼妓の見せしめ旁存分ゐ此棒を喰やアがれと立かゝれバ御供の七も進み出「唯今旦那の仰しやつたを何ゞ聞たゝ知らねエが平日ともに御家人風を吹せる者羽の厄病神い遊女屋中の厄介者ゆゑ此後とも威張ぬやう充分懲して呉るるかゝ以來は心を改真て武家なゝバ武家らしくお作さんを早く返して旦那に口詫をするゞよいト飽までに罵詈かゝ棒と振上て面部手足の嫌ひなく當るゝ任せて毆ほどゝ肉い破れて滴々と流るゝ血汐ゐ結び目の締りて苦痛に堪ざると亭主い見づゝ愉快氣に「抱への女の折檻には毎も蘿蔔を押込が此野郎も度胸がよくて穴の孔が廣ゝム から蘿蔔を穴へ押込やれと指揮に從ふ御供の七ゝ金十郎を地ゐ壓伏せ尻を捲りて無殘にも生蘿蔔を孔の中へ刺入らるゝ苦しみに遂ゝ悶絶したりける

○第拾回

「雨い降出を暗さい暗し右ゝ左ゝ分らねへで人と探すには都合が惡いが大哥い何でも甲子屋

へ撥ぎ込れたに違へねへがお作さんゝ如何したらふあア「何にしても銀坊ゝ引上られて如何されたらふ「松公や藥公も一所でねあがら阿容〳〵と逃出〳〵さとゝ意口地がねへなア「平素どんなに威張てゐても不意を喰てはいけねへものだよ「甲子屋の樹さも聞たしお作さんの行方も如何か早く知れ、ばよいごと奔走く二個り落破戸が「オイ〳〵何だか黒い者が此往來に轉がつてるせ「何をいふのだ氣味の惡い大きな黒犬でいねいかイヤ〳〵人に違へねへせ何人だと縛ふきゑま、放出してあるのさ「ヤア〳〵起ゝ大變さ銀坊大哥だ〳〵「何新粂の大哥だと「血だらけだが死もせず未だ〳〵體が温かいから此儘二人て擔で行ふと縊しま、に肩にかけ新粂方へ持行ゞ松五郎藥藏始め大勢集て介抱し漸く我あかへりければ松五郎ハ齒を嚙しゞり「斯う充分に打擲したうへ繩の儘で往來へ放りて置とは餘りの亂暴已等如何そるお覺えてゐろと刃を持て立上るを金十郎は押留め「今夜の間に押掛ては何の怨もない客にまで怪我が有てハ濟ぬから今夜を過して油斷を量り明日の朝妓樓の粂ゑへ急に押掛て片端から屍の山を築てお作と取戻し怨を晴を了簡あをば今單身で出かけるは却て短慮功と爲ず今夜ハ酒を飲明し明日を晴に血の雨を降ーて呉るといふに任せ金十郎が傷所へ膏藥を打抔ゝあがら殺風景の茶碗酒汲かハし

つゝ死を惜ふ折から門の戸と叩き「モシ〳〵此扉を明ておくれといふハ女の聲あれゞ藥藏ハ立上り「姉子の聲に似たやうさダト言つゝ出れゞお作あれゞ並居る者ハ驚きて「姉子ハ血何して脱て來た不意を擊れた動作背作紛れ必定おまへハ甲子屋へ取歸されさゞ思ひの外「アイ松さんゞ藥さんとが大勢を相手に打合てゐる隙に關口の川へ飛てみ内藤樹の屋敷の檣を破つて向ふへ這上り御庭の山に身を忍ゞせて息を殺して居やしさが夜が更たらふモウよかふふと思つて密と出て來たのさト始終を聞て金十郎ハ怒の中にも大きに喜び「壁へ喧嘩さ勝たとてお作を先へ

取戻されて面が

立ぬと思つさゆマア〳〵是で安心さと更に下物を肴めて又一盃を汲かはし各閨房に入たれど金十郎い躬の痛みと飽まで恥をかゝさをー積る恨に堪かねて眠もやらず短夜の東雲告る護國寺の鴉の啼を待ゐたり

○第十一回

其翌日の朝まだき金十郎と松五郎い甲子屋へ切込やむと支度最中近邊の乾兒を始め博徒等い數十人馳集りて共に力を添んと云ふを金十郎い堅く停め「其志しい嬉しんぞ毆れた相手い兄弟なれば敢なく影家の加勢を頼むで意趣返しに出るけてい却て此方の柔弱にあり他への聞ゑも恥かしければ愛宕の暗嘩（闇取四ッ車三ッ引がめ組の消防人足一同と戰ひし有名の騒動）同樣に相手は何程大勢でも已と松とで引受るぞ同業仲間の善親もあれば隣近所の家々かゝ加勢に出るける容子あら御苦勞ながゝ惣掛りで敵を倒して防いで呉ろと頼む音に一同い「然いゝ譯あら遣くから見物をしてゐる様でスワと云さら切て出るから何でも立涙にやるがいゝと力を添て博徒等い得物〳〵を隠して携へ金十郎に先立て我も〳〵と押出し後より進む兄弟い白地の浴衣に三尺帶刀の提緒を襷に綾どり手拭を以て鉢巻とし布にて柄を巻添し白刃を等しく引提て大雨を厭はず走行く其光景い富士の狩野に十番切の名を擧し曾我殿原ゲ扮裝も斯やと思ふ杜鵑花の盛を散す血汐の紅ゐ菅羽の街を洗さんと甲子屋の門へ進むで兄弟は大君に「前夜の怨を忘いしめへ金十郎と「松五郎が「平素と破落戸同樣でも斯う改

まをバ武士の手並怨みの刃を受て見ろト暖簾を潜つて馳入ば此はそも如何に何者ゥ疾くも斯と告たりけん主人を始め娼妓まで皆何方へか脱去て恰も空屋の如くおれば思ひ範ざる氣も挫げ聞毎〳〵の隅々まて殘る隈なく探せども一家ゑ人氣あらざれバ呆れ果たる計あり〳〵が松五郎ハ忍づき「風を喰つて立退てもまた遠くへハ行まいゥゥ隣近所ゑゐるハ必定斯うおるゥらハ何處でも搦ハを踏込で甲子屋の飯焚きも切殺さゑヤァ熱腸が愈ねェと戸外をさして馳出し跡には獨金十郎が内證の火鉢の前に仁王立に突立ゐたるが勢ひ込たる氣の勞れに息の切ると鎖めんと腰手の井戸の際へ下立ち持ゐる刃を流しに捨置き水と釣んとする折わゥ何方ゑ隱れゐさりしゑ御供の七は斯と見て走り寄つて金十郎が刃を奪ひ脱んとするを夫と見るより傍へゑ有合ふ大薪割を掉より早く七ゑ脱行く背後より二ッにあとと腦天から割れて何ゥと堪るべきアット叫んで倒れなゲゥ落す刃を御供の七が目鼻の間へ突付て「汝ハ昨夜金十郎を絶入る迄に苦しめた其怨報は此通り白根ゑ勝る白刃の切味 賞翫しそれと言るゥから尻を捲つて突んとそれバ一生懸命刎起て飛が如くに脱去るを逃しハせじと白刃を打振り何國までもと追てゆく

○第十二回

櫻木町の裏手ゑて字を若荷畑と云ふ藪の小蔭へ金十郎ハお供の七を追詰て又撃かける刃の下を潜りて土塊石瓦と手當次第ゑ投つけ崩れかゝりし生垣を破りて向ふへ脱行を追蹤んとて向ふを見れバ甲子屋を先に立同業の住吉の主ハ異名を大辰と稱し探索方の中ゑも大哥おるが切店松永の亭主と共に三人にて此騒動を其筋へ訴へんとて馳行を夫と見るより金十郎はお供の七を捨置て甲子屋こそ當の敵遁しはせじと猛直に先垣を躍越ゑ野禽を見たる荒鷲の羽嵐起すに異らぬ飛來て背後より物をも言ず肩先と六七寸ばゝ切放せば金十郎が爰ゑ在とも思ひ寄らけぬ大辰と松永ハ大きに驚き

△「ヤァ大變だ人殺し」「出あへ〳〵」と叫びつゝ後をも見ずに遁てゆく甲子屋

は手を負おがら「抱の娼妓を偷ざうへ己まで切とは無法ぬ悪徒モウ斯あれば一生懸命喰付てゐりと此怨みを晴てくをんと組つく所を切拂ふ突先に眼鼻の間と五六寸切れおがらに猶痍まず眼い見ねねども飛掛る肋の邊と双深く刺れて動と伏轉び拳を握り齒を喰〳〵ばり「エ、殘念といふ而へ泥足を踏りけて「武士の黨氣地の怨の刃此皆を思ふおふお作を奇麗に渡せばよいよ後悔しても最う叶いぬ往生際い人並に日頃非道の悪怨を止め念佛でも稱〳〵やアがをと罵りながら胸骨へ登しかゝつて十い滅の刃を刺貫かんとする所へ「ヤレ先待ぬり金十郎と聲を掛つゝ生垣を踏越て駈來り今や十い滅を刺んとする腕を押へる者を見るば實兄井本徳次郎と町内の若者頭新七と云ふ者あるにぞ「舍兄い如何して此騒ぎを知て此處へと來るをつた双新公も何故に十滅いと刺のを止るの

さ「今朝の騒ぎを聞込て舍兄君が危配し人あ怪我てもさせぬうち金十郎と松五郎を疾く連て歸さいから新さん一所ぇ行て呉ろとのお頼だから諸方と尋ねやつとの事で此處で會たが酷い事として仕舞あとつたね「仮令怨いあるにもせよ十い滅を刺て殺さねば深寸を負せた丈で濟むに最う一足疾りつたら此騒動いさせまいに何い兎もあれ相手の主人を斯しさ上い其他の者ゐ遺恨いおい筈なれば己と一所に歸るがよいト揚たる白刃を拾て「新さんい松五郎が何處にか暴行てゐませうから御苦勞ゐがら近邊を搜して連て歸て下さい「そこい私が承諾やした貴兄い金さんを早く連てお歸りゐせェと言をつがひて新七い護國寺の方へ引返せば徳次郎い金十郎が袂を攜へて我住家へ無理に伴ひ歸りし翌日甲子屋の主人と御供七い重傷の療用叶はずして遂に鬼籍に入さるい積年娼妓の殘酷に苦從させさる報いあらんと云ふ噂さへ高りけり

○第十三回

爰にまた雷羽町の切店ある松永の女房お秀と云ふい故新吉原の小格子の娼妓豊花と云ひし者あるが其頃新粉松五郎の馴染を重ねし事ありて今松永の妻となりても豊日に繼らず親し

くせしが今朝よりの騒動に同業の者どもも家族を伴ひ遠方へ立退き或ひは門を堅く鎖して恐れ慄きゐるもある其中ゑ松永の主い甲子屋の主とともに家を出しが金十郎に端なくも出會て甲子屋が切れし体を見るより大きゐ驚きて逃かへる途中にて妻のお秀に面會し今云々のとおりと言葉急しく語りつゝ我家の奥へ隠れしがお秀は大膽あるものゆえは此騒動に懼る、色あく辻ゐ立ずみ人々の東西ゐ走るさまを見てゐる處へ松五郎は兄に別れて甲子屋の家内の者を撃取んと彼所よ這所よと捜索めぐり五丁目の四辻へ來るを見るよりお秀い駆ゐけ「松さんおまへ如何したのだエ今日の騒ゑを何者ゑ裁判所へ訴へて今捕吏が來るとの話し夫ゑ貫郎が人も切ずゐそんゐに長い光る物を振廻してお出たから今にも縄に縛るたらふと大体心配さとではゐい斯してゐて一般難ざかち其抜刀をは吾倘か預け鉢番

や襷をはづし吾倘の下駄を貸させうゝら何喰いぬ面ですぬ刻も早く宅へ歸つておしまひよトいはれて實ゐもと覺りしかば「斯ゐ騒ゑを起したのは舎兄と自己と二名だゞ相手も討果ぬ其うちに縛られて詰らねへから怨みと晴すい又のとしし如何さまおまへの敵へに任せ刀い暫く見世へ預けて今日の處い歸らふよト計略とも知らざゐば鞘ゐき刀を手拭に巻てお秀ゑ手渡し何れ財ゐら取ゐ來るまで慌に什舞て置いてくんゐよ「何でもよいから追手の來ぬうち銀ちやんの居所を探し一所に早くお歸ずよと松五郎を去せ一跡にて甲子屋へ刀を持行き同家の妻と示し合せ主人ゐ衣服に泥れたゐ血汐を刀に塗りつけて人殺の暗據ゐいこれ究竟の物なりと其血刀と二人の妻女が即夜町奉行所へ携へ行き甲子屋と御供の七ゐ重傷を負せしい松五郎ゐりとゆ立證據の刀と差出しゐゐば翌朝未明に其組の同勇を番羽へ馳せ新粂方へ踏込で松五郎に縄をかけ引ゐ行しを金十郎い兄偽次郎が家ゑゐて留守にさるとゐとも知ふを歸り來りて大きに驚き人を殺しゐ本人の金十郎ゐい捕ひなく聊ゐき弟を引立行

しは何かの間違あるべけれバ是よりも直に奉行所へ自首して弟を救ハんとて丸の内へと急ぎ行ぬ　しハ剛毅果敢極りなきも哪か義侠の所爲といふべし

柳亭叢書第四輯終

柳亭叢書第五輯

○唐紅噂杜鵑花　第十四回

東都　柳亭種彦著

當政府の町奉行所ハ呉服橋内に南北二ケ所立並びて松五郎が捕をしし月番の北町奉行榊原主計頭ありけれバ金十郎ハ同所の腰掛に臥さ甲子屋主從に重傷を負せ死に至らせしハ弟松五郎よハわらずして我が所爲ありと自訴せしの同家の妻が訴へを信じ金十郎ハ証據おけれバ更に採用られざるを爭で弟を救ハんと二晝夜の間だ腰掛ゐ在て此願意の達せざるバ死とも此場を退かじと動く景色もあかりしもゐ掛りの與力ハ持あまし其支配の頭たる明樂八五郎へ照會し其筋方引立させけれバ止事を得ず引取しが其翌日更めて組頭差添のうへ町奉行所へ出頭せよとの差紙到來ゐたりしかバ時刻を違へず榊原の役宅へ出て白洲へ廻れバ主計頭出席ありて掛りの與力同心等威儀を正して前後に扣へ金十郎ハ御家人ゐるバ差添と共よ椽端ゐ座し連累の遊女屋一同ハ皆砂利の上に手伏ゐたり其時奉行ハ金十郎に對ひ「其方が立にハ昔羽の料理屋甲子屋主從に深手を負せ死に至らせしハ弟松五郎の所爲ゐらで全く其方が宿憤を晴さん爲の暴行ありと自訴におよびしその原由ハ渠が抱へのお作といふ者

を歎日間家に留置返さゞるより起るといへども免の場所の吉原の外に遊女遊世の者がある

ふゝ然れバお作ハ料理屋の家婢ある事ハ勿論ならんといふ詞を押返し「仰でハ座れども免の場所の有無ハ置て看羽町にハ甲番屋初め同業の遊女屋大店小店併せて廿八軒あり一晝夜の揚代二朱よりて淫賣渡世を致す事ハ今改めて吾輩が申上る迄もなく江戸中の者の知る處お調べのうへ然るべく御賢察を願ふとあれバ「確と左樣の理あらバ公儀を偽る隠し賣女其分にハ差置れねど全く遊女と存たハ密通の上の心得違ひわ若や心得違ひあら熟考致して實を申せと論せど聞ぬ金十郎ハ「年來馴染で召連らへりしお作を遊女か茶屋の下女ゝ存ぜぬ程の心得違へか何樣あつても申座り△

△ませうや且ハ同所ゝ廿軒餘軒と並べし料理屋が夥多の女を召抱へて何等の客をとりませうや此儀を以ても申承知あらんと肩を敲いて申立れど遊女屋どもハ異口同音へ「淫賣あどゝハ思ひも寄ぬ料理屋渡世に給仕女を召抱へ置のみおりとの問答時と移せども埒明べく●

女屋おりと言張ゝ吟味與力の掛りに下られ一層嚴しく糺問するに此遊女屋の主人ハ皆與力同心の探偵方あるバ依怙贔負の沙汰を以て遊女屋あらぬ料理屋を金十郎が一端の心得違ひより遊女屋と訴へ出たる疎忽の罪を詫示談を整へ願ひ下よト理を非に曲て賣れども壓制の權威に屈せぬ剛氣の金十郎あるバ娼妓に紛れなきよしと述て吟味與力の詞に服せず遊女屋仲間ハ其筋へ賄賂を贈つて罪を蔽へバ訟訴の果べき時ぞおき

●もあらされバ金十郎ハ權倉へ送られ其日の戯訴ハ果たるが猶其後も金十郎ハ遊

第十五回

刑を以て邪を正すが爲なりと古書にハ見もゝ幕府の末路に至りてハ賄賂の爲に刑法を紊

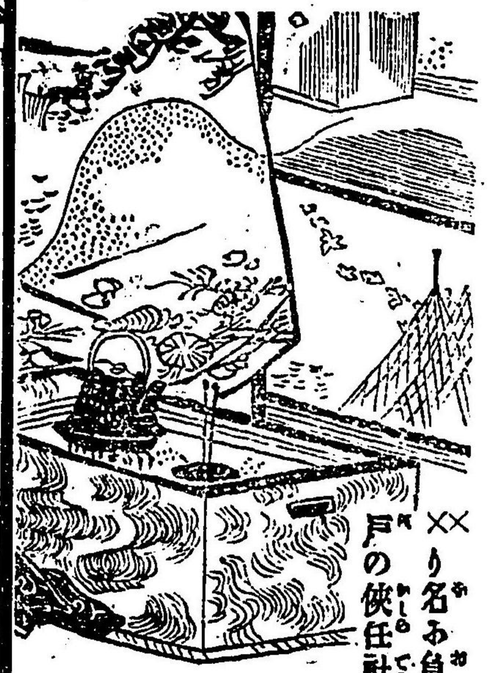
り町方の與力同心等が擅斷を以て正を枉げ邪を助くること寡あらねば着羽町の隠賣女も亭主が探索方の内情あれば永く繁昌おさしめんと額を集めて計れども金十郎い尚屈せず娼妓に紛れおしといふにぞ憎い鷹には餌を飼ふ譬へ金十郎に情を懸けて示談さするよ若すと決議し或日親類某氏と金十郎を法庭へ呼出し「先頃甲子屋主從に深手を負したる者は弟松五郎が差料の刀を以て甲子屋の女房より訴へ出づを其方が所業ありとて自訴ゐ及び其件に付て着羽町の料理屋共を悉皆く遊女屋ありと申し立れば相手は料理屋ありと爭ふ其曲直を表向きの吟味を受すと示談よして其方が誤りゐ決する時は松五郎を出獄さるも法もあるべし左おも右にも其方は人を殺し、者おらねば出獄の上自宅に於て禁錮を申付る間落着まで い親類中にて急度宅番致すべしとて親類の者に引渡さを計らず歸る事を得たればお作をはじめ親戚乾兒と只管ゐ喜て尚此上は松五郎を救ふ示談に及ばれよと顧に勸むる其折から遊女屋廿八戸の惣代に蓋

添ひ同町の鳶の頭と面の賣たる家主の甲乙あぢが問來り見舞の酒肴おんどを賣し一通りの挨拶終れば惣代の者は膝を進め「計らず今度の騒動より御兄弟とも長い間だ入牢されさと氣の毒千万是ゝら互ひの怨恨を解いて和談を扱ふ積りおをど甲子屋始め一同を隠賣女に相違おいと貴君ゐ強て言張られては同業中は申すよ及ば申名主家主よ至るまで重さ咎めを蒙れば一端の了簡遊へで遊女屋渡世と申し立さは全たく唯の料理屋ざと願ひ下げて呉られるおら甲子屋の女房から松五郎さんを願ひ下げさせ女房始め同家の者い同業中ゝら一生涯何不足なく扶助そをば聊か此方を怨まぬといふ證書を取つて上るうへ示談を承諾して呉た謝に當時明様の切店二軒(里俗に三店といふ)を御兄弟よ贈つたうへよ毎日〳〵金一分宛遊女屋中より見次で贈る事にして如何ゞ和談よして下され併し自今い同業の仲間とおれば抱への女の淀を

破らぬ其爲にお作い一端甲子屋へ戻して呉ろと懸合へば「假令一日一晩でもお作を素直わ歸す程あら此騒ぎをした趣意が立ねば其餘の事い鴨入たがお作に於てゝ歸されぬと俠客を立ぬく金十郎が動ぬ詞に辟易ーでその日い其儘歸りし後に再三再四掛合ゞ更に取合ふ景色あければ當時江戸に屈指の巨魁等と稱されたる火消の頭取博徒の親分雇人宿なんどが仲裁に立入り金十郎を説諭すれどもお作を返せ歸さねといふ一條にて纏りかね立といあしに此隙に二年餘りを經たりける

第十六回

安永天明の頃よりして陸場所といふ隱賣女江戸市中ゝ增殖し何れも繁昌極まりしが漸次に廢れる時到りーり君に聞えし君羽なる櫻木町も雨に移ひ青柳町も秋風に散る光陰に關守あく金十郎が禁錮の間に前後三年餘を經てお作を戻さぬ一條ゝ



××り名ゐ負ふ江戸の俠任社會が仲裁も皆畜餅となり遂

ゝ示談の整ハを一件全く落着せしハ文政元寅年にて本人金十郎ハ屋部住切米を召放さゝ八丈嶋へ流刑に處せられ弟松五郎ハ百笞のうへ重追放ゝて佐渡が嶋銀山水換人足をヤ渡されお作ハ三年十ケ月新吉原へ遊女に下さる君羽の遊女屋廿八軒ハ料理渡世と官を偽り隱賣女をせー科に因ておの〳〵百笞のうへ重追放にて家財ゝ悉く官沒せふゝ抱への遊女は一同に其親元へ下さゝゝり又同地の名主某氏ハ隱賣女を其管下へ差置さる科ゝよりつて退役の上所拂ひ又君羽町七丁目八丁目九丁目の家主等ハ同罪ゝ依て十二貫文宛の過料をヤ渡され同四丁目五丁目六丁目の家主ハ六貫文宛の過料同く一丁目二丁目三丁目の家主ハ三貫文宛の過料にて逐ゝ君羽の遊女屋ハ此一件より跡ゝ斷閉にも光る星谷の名所を尋ぬる人もあく永き廢をとゞりゝけり此大獄や苟くも幕府のゞ家人ある者を兄弟流刑に處するゞもゝに斯數十人の連累が多少の罪科を蒙ふるを以て幕府の權を肩に著る遊

蕩社會の御家人等が横行せしを推量すべし偖も新粂金十郎は八丈島に流されて三根村の内
に住居其島人を妻として更に七人の男子を儲けぬ其中に一個の孝子ありて金十郎を救ふの
美談は第十七回に分解べし又弟松五郎は銀山の苦役に耐兼て幾程もなく同地にて病死した
るは一朝の怒りに其身を果すに似たれども兄と援る義心に出て敢なき暴舉あらざれば最も
憐むべき者あらずや此は是后の話〜なほど事の序に記すのみ

記者曰今回は公裁判決の一段落あるべ唯其筋を述るのみにて問答の面白き場合もあ
く挿畫に出すべく所もあけれども お作が新吉原の娼妓となりて真夫と恐し金十郎が配
所に在を慕ひ歎く光景を畫き著せり畢竟お作が出廓の結果は何如なりしや知る人あ
らを憾むべし

第十七回

氷天髣髴青一髪と山陽外史は詠めけん西も東も海原の果は雲井に續くまで眼に遮る物とて
は波の上行く鷗にも浮沈ある世の中や昨日は幕府の御家人とて四民の上にたつか弓武家の
權威も今日はまた身も扶疎る潮風に皮膚も黑む嶋人と何の間にかは磯馴松枝葉繁りて七人あ

の子はなしたれども旦暮に忘れ兼さる故郷
の江戸も此地も異らぬは月の出入るのみ
あれど變果しい我妻ひかしの体は新粂の
金十郎とて鬼神も怖をし者を老ぬれば妻
子の爲の活計に忙しく走る箴の書絕ぬは
名産八丈の織屋とこそは知られたり斯る
處へ江戸よりの便船に到着せし商賈らし
き旅人の年齢廿才ばかりなるが島人に案
内さをして闇と入るを金十郎は確りやと問
て出て見れば彼旅人は携へさる笠も荷
物も地に抛ち走寄て縋つき「慈父さんで
ございますわお愛妻でございましさといふ面を見て此方も愕然
「オヽ汝は四男の倉吉かよくまア尋ねて來て呉さと織屋の方

を振かへり「オイ〳〵江戸から倉が尋ねて來たせお竹〳〵と呼立れば此嶋へ來て配遇し金十郎が妻お竹い禦の儘よ老來て「オヽ倉吉か汝も健康で大そう成長あつたるアと親子が手に手を採合ひて嬉し涙ゐひせびしが暫時あつて金十郎い「此門口に立てゐすと兄弟等も無事あをば奥へ通つて會がよし積る話しと聞もしつ聞せもゑやうと父親が笠と包を取上れば二十餘の倉吉を小兒のやうに母親い手を曳添て笑し氣に圍爐裏い端へ座をしめつ一別以來の口儀終れバ金十郎い捐折筭へ「汝い丁度十一の歳ゐ江戸へ出したゐる此嶋の掟といふも知るまいの流罪の者が此方へ來て出生たゐい罪もあけれバ何國へ成とも行度と願ひ次第に免さをて何れも故郷へ歸れるが浮田の一族バかりよい往古から一人も他國へ出るを堅く禁じ此嶋中を分家を殖し又浮田家い加賀の屋敷に深い縁故のあるに付て加州邊から年々ゑ多くの物を惠まをて一家豐に此島の長同樣ゐ暮されるゲ其他の流人の子供等ゑ勝手次第ゑ出られるもゐ汝の幼少い時分から格別に可愛がられた相州大住郡大畑村の名主海藏殿といふ人が赦免に遭て歸るとき兼くの子供を手師へ預て皆島人とした所がつまらぬ事もゐ倉吉い私が連て兄さん〔徳次郎を云〕の處へ送つて遣ふといふ深切な詞どんひ汝も海藏殿ゑよく馴染み叔父さんと一所なら江戸へ行ふといふに任せ出船させたい遂此頃の事と思ふもモウ十年餘よくまア勧ねてくれたおト兩親面を見合せて泣ば並ゐる兄弟も友背に啼や嶋千鳥親族九人圓居して互ひの無事を祝しけり

第十八回

母のお竹い話のうちゑ廚へ起て調へる膳の支度も急しく波濤を隔て十年餘吾子の面も陸蒲の汁の向ふへ取添去給も骨に會ふ如き海月と防風の味噌和の味と鯵との鹽鹹き島乾魚さへ湯を通し「江戸に住でい鹽鹹い島の下物い喰られまいがサア〳〵ゐ膳にするがよい尊父に似て來さあらゐ酒も好に成たかと金十郎に一獻つぎ其盃を倉吉にさせバ兩手でおし頂き「慈母さん如何ぞゐ携あさいまそあゐ盃は頂きまもがゐ酒は無調法でござまするら久し振でゐ手料理のゐ膳を譯山給ませうと盃を下に置き食事を濟せて膳を片寄せ「先刻もお話しの通り大畑村の海藏さんが伯父様の家へ送りとゝいけた其翌年伯父様の所から木挽町二丁目の銚職のゐ用達へ丁稚奉公に參りまーたが奉公大事と勤めさもゐか旦那ゐ夫婦の氣に入て職業も他の者よりい目を懸て教へられ何不足なくして下さるうへゐ細工所〔舊幕ゐ

本丸中にある詰所」の御役人で吾儕を格別に贔負にして下さる方があつて一昨年滿期が明たとき其ほう方が旦那と相談して倉吉の親い遠方の八丈にゐるうへに頼まれて思ふ伯父叔母も今でい死で跡一人世話をしてやる者もおければ家を持して遣度と旦那も大そう力を入て永の年月夜遊にも出ず骨を折て稼いだい若者ゆえい感心な奴だと頻に譽られて旦那樣のほう姪子を女房に下されて横山町一丁目へ鋏屋の店を開き唯今でい如何やら斯やら職人の二三名も使ふ樣に成まし〻が吾儕を江戸へ連て出し海嘯さんも去年の春お亡おりに成たとゆ事でございました「舍兄夫婦と松五郎が死た便い聞ゐたが汝が一家の主人に成て奉公人でも置やうに成さい實に親まさり夫に引かへ此親父い八十餘に成おがら生涯嶋で果るとい悴に對して恥かしいといへば小膝を摺寄て「其思召が有ますおら何故御赦免をお願ひあさらぬ尊父さんより幾年か跡から流罪に成た者さへ幾ふも御赦で歸るのに尊父さんに限つてい何故お赦ごのないと怪む者のよく考へて見ますれば年來島に住馴て六人の子もあれば江戸へ出るのがお忌に成り大赦が有ても御自分の勝手を嗚にお在の事と存知ましたが左もあくい流罪人の名を洗ふほう赦を願つて我家へ何故歸つてい下さんませぬと怨み歎けば金十郎も潸然と涙を溢し「否己とても故郷もある歸り度は山々あれど如何いふ理か已に限つて度々の大赦に洩れ斯してゐるとは何たる不運か「然いふ事あらば赦に成る手蔓い幾條も有まそから倉吉が江戸へ歸次第願てほう免の吉左右を必ずゆきかせゆませうと孝心深き詞をつがへ一先江戸へ歸しい慶應元丑歳よて金十郎も當時い豐ある暮を身と成たれば八丈縞と二十反江戸への土産に與へしとぞ

第十九回

予は人ゑ其父母を非られざるを以て孝とするある漢書に眼を晒さねど天稟の孝心深き新粉倉吉い三綠山增上寺の役僧何某ゑ賞負あさるれば是が手蔓にて其筋へ父金十郎が流罪人の名を削り赦免あるたき赴きを歎願せしに町方懸りの官吏も金十郎が處刑に就し頃とい年歴推移り大方い變りたるぞ偶々其事情を知る人ありて倉吉を招き諭すやう「金十郎が悴にい稀ある孝子の歎願い感賞とべき至當の事にて然あらぬ迄も度々の大赦ゐ洩たる者あれば江戸へ歸すい容易るぞ凡此一件に付てい町奉行いふに及ばを與力同心其外にも江戸市中に名望ある爲の者雇人宿の頭おんどが力を盡して和談を整へさせんとしたるを金十郎が一

徹の強情を張通し女を戻さぬ葛藤より罪を蒙る者多く是が爲に晉羽の町い今に廢れて近邊へ難儀を懸し騒たれば關係のある者迄も金十郎と深く憎み遠島されーゝ飽足ぬと怒り罵る者さへあれば其人達の生存てゐるうち罪を赦されゝば暗殺なぞの報讐に遭ひ却て身の爲あらぬを想ひ是迄數度れ大赦あも態と漏して嶋へ置ぎが五十餘年の星霜を經たる今日に至てい連累の者も皆死絶ねて妨げと成事もかけれい汝が願ひを幸ひに速うに罪を免さんとありしかと倉吉い嬉ぎ涙にむせび「公議で然いふ思召とい少しも知らず只今まで親父に限りて何故御免ぎがおい事かとお怨みヤて居まーたい眞あ恐入ますと官吏を伏拜まて其手續きを願みしゝば慶應三年の春に到り德川氏が祖先の法會を名とーて赦罪ゐるべき内命を倉吉あ傳へーしかば天へも登る心地して父を迎ひの船ま乘組再び八丈島に赴きて我家へ父母を迎へんといふに母い素より嶋人にて悴も兼く嶋にあれば住馴ぎ地を去るを否誘引るゝを辭しゝゝ其意に任せて兄弟等も隨意あ嶋へ殘ーい住いせ金十郎い茲ま始めて晴天を仰ぐの時到り妻子を始め近隣の者ふ暇を告るの條い瑣々しけれゝゝ略て記ず看客よろしく察ー玉へや

第二十回

斯て金十郎が乘たる船い順風に帆を揚て海上遙かに漕去ゝ涙よりなよ竹の妻い磯邊に聳たる小山の松に攀登り夫婦一世の生わかれ何時あ便を松浦潟石にも成ん悲さに轉び落るを悴と嫁ふ助

四隅れてかへりしが猶其後も夫婦子が無事の音信をきくよつけ一同安堵したりしとぞ金十郎い江戸へ着し倉吉が家に同居せしが親を愛する孝心より本所番場町へ隱居所を求め移りすませて妾をつかいせ何不自由なく見次しが倉吉い明治十二年病に罹りて亡ありし孝子の不幸い哀むべし同家い今ゝ横山町に錺職ふて存在せり金十郎い現今九十二の高齢あれど傍訓新聞を讀に眼鏡を用ひず遊歩に杖の輔けを借ず八十八歳の時妾に生せたる一男子今年(明治十四年)四歳に成と愛し老てます〳〵壯健ある俠任の勢ひあるい豈河内山宗春片岡直次郎等の如く終を善せざる兇徒と同日の論あらんや此原稿い實に新奴の翁が暗記の一話を編者に托されし物あるゆゑ毫も想像の虛談を交へず看客必ずしも小說稗史の類ひと見做し玉ふ勿れ

（鳳說杜鵑花畢）

○袖ケ浦餘波大潮

第一回

兵燹の黑烟天を焦し彈丸雨の濺ぐが如く敵も味方も入亂れて戰ふ中を一騎駈よ馳來りたる一個の勇士い是あん溟華の奧羽にて米倉源吾といへる者町奉行跡部山城守が馬前あはつと蹲踞き「賊魁大鹽平八郎を船場の街へ入たてじと天神橋を燒落し茲を先途と防禦の備へを嚴重には致せしかど渠い七書の奧儀を極めし兵法の達人なゆゑ機よ臨み變よ應じ神出鬼沒の進退あれば我手の空虛を擊破り先手い既に大川を渡さじとする勢ひあゆゑ疾く援兵を繰出し味方ゐ力を添ずんば防戰甚だ危ふくして必元あくいへば此儀を注進ずさむ爲よ馳參つていへば其手配こそ肝要あり在下は又是より引かへして力を盡し鋭き敵の先鋒に當り若敗ねば花々しく討死致せ迄あれど在下が命のあらむ限りい組子を指揮して賊兵を船場へい入ずまじと云つゝ迅く身を起し濱方さして走行く後影を奉行い見送り「天晴勇々しき武者振りあ源吾が必死の覺期にてい孫吳ゲ秘術を得たりと聞く大鹽父子も破るい難し去あがら忽かせにしがたき賊の勢ひなれば援兵を操出させんと駒の手綱と引かへし城中さして馳行く途も鯨波い天地に震ひ貝鐘の音冷じき修羅の巷の光景い身も慄かるゝばかりなり道路い血汐に塗れたる腥き風あらづして軒に釣せし葱も戰ぐ涼去き風の冷々と冰肌ゑ通りて醉醒の眼を開けば戰爭は跡あき南柯の夢あれば胸撫下してホッと一息月影早き窓明て扉外を見遍る折しもあれ衆き藝妓の其中に常から特て親交き二龍い風呂屋の戻りがけ窓下ゐ立止り

「オイ小米さん〳〵何を茫然往來を望てゐるのゝ情人の通るのを待てゐるのかエ「イエ〳〵そんな譯でゝあいが今日ゝ午前お客さんゝ南吉へ誘引れて大ろうに酩酊さゝゐ内へ歸つて手枕ゐ貸本屋の持て來た大盥の騒動を讀かけてとろ〳〵と眠おがゝ其時大そう力を盡しゝ我儕のお父さんが未だ壯年で勤めてゐて跡部樣の御馬前へ注進に來た怖ろしい亂ちさ騒ぎを見るにつけお父さんに怪我ゝあいかと氣を揉で冷汗をびつゝより浸たとお思ひよ「オヤ〳〵夫ゝ平生から柔弱お貴孃の事ざから嘸心配とおしたらふね「大ろうに氣を揉だ故お未ざに胸が動氣々々するよ「成程貴孃のお父さんは大盥騒動の時に大ろう御働さだといふ事ざが當府で戰爭が始まつたら嘸まあ怖い大變だゝふね「お母さんが生てゐるとき南の方まで脱歩行て怖ひ思いをしさといふ話は毎度聞てゐたが四十余年の昔ーも今も戰爭といふものゝ極野暮で寔に深く下さらあいねエ「ホンニ小米さんのいふ通り戰爭ゝ出るのも大將に成て指揮でもする身あらよー兵卒に成て梨園あゝアゝリアく〳〵と云おがゝ剛者ゝ投られたり踏らをたりして働くのゝ眞實に氣が利あいねエト笑へば小米ゝ彌々巍ぎ「サア二龍さんの御云の通り怖い所へ先手ゐ出されて氣ゞ利あいと云れゝば如何ゐ我邦の爲だと云ても忌に成でゝ有ませんゝ夫に附ても悲しのゝ情人が此獄ゝ彌々徵兵の撿査とやらに是非出るけれゞ成あいどさ「サヤ〳〵夫ゝ憫然ざねエ如何お好い手蔓でも有て脱る理にゝ行あいのかエ「サア脱れられる位なら變さんも如才おく如何にゝ工風とするざらふが二百七十圓といふ貨幣を出さあけれゞ容易ゐゝ脱れるわけゐゝ行あいのが次男ゝ生れた悲しさだと一昨日も鳥渡會たら涙ゐ昏ての話しで有たが十や廿の事でゝあ〜二百圓余の事であつてゝ私にも工面ゞ出來ゞト云で徵兵に出た日にゝ變さんは體も怯弱し水揖と風癆釜より重い物ゝ持た事のあい茶の宗匠さんの息子ざから假令戰亂はおきにしても雨風の日も休みゐしよ演習をするざけでも煩つて死ぬたらふよと皇國の爲も世の義務も白齒の生娘同樣に泣て語るは素人も藝妓も戀ゝ差別おき眞心見ゐて憐なり二龍ゝ小米が實義の話に慰め兼て溜息つき「然いふ譯でゝ心配ざねエ變さんの氣性でゝ中々務めされまいよ併しおごから貴孃のやうに餘う氣を揉で心勞しても通付く話しでもないからお酒でも飲で憂苦を散し熟く相談をして見たら又善ゝ風の吹く事もあるたらふかゝ必ずともゝ果々思つて貴孃さでゞ煩ゝひでもしてゝ難澁ゝね私は今から東京へ發程のお客を梅田の停車場さで送つて行ので晩さでの揭

代い附てゐるから今夜い再三慫張ずに貴嬢の宅へ遊びに來て又相談としやうよト朋輩同士慰ひる詞も酸あ甘みある梅田をさして急ぎ行く

第二回

好男子にと何が成るとと古來よりして疑いる、い髭鯰の類ひに非ず農家の野夫にも稀ゴして多く工商の間にあり其工商の間ひに有て優に眺しき若者い大坂府下の街はづれ玉造の近邊に武者小路の流派を汲みて閑密庵と稱さる、抹茶の宗匠の次男ある夔太郎といふ者にて色素くまて眉秀で黒目勝にて唇るい朱を澆ぎたる如くあるに盜る、計の愛敬い道頓堀でい割三郎雁次郎にも勝りぬべく東京にてい櫓十郎我當あんども三舎を避る容貌のみかい茶道い素より香花碁將棋三味線さへも絢娜めく麗に寂の交し好氣お息子で有ながら堅固過るほど謹と深くて小說稗史や新聞を讀を其身の嗜みとし終日家に引籠り世に交る事稀ありしゲ其實父ある閑密庵い南北朝地の寺樓や新町の廓あんどへ抹茶の稽古お出張を携へ大いに持賞さるけるが或時南地の稽古日ゴ遠ゴ障る事のありて出さたらをねバ夔太郎を代稽古に出せしに此頃頻ど貴盛る若嬢の小米は宗匠の閑下に在て鳳流の道を好めば名に因む夔喰ふ虫も

數寄者同士手お手を握持添て捌く服紗の紫も色變りしと聲ひつ、水も洩さぬ水指の底さへ深き足屋釜沸て互ひゴ熱く成る懇し濃茶の代稽古數重りて何時しかお女夫約束逸せしかば夔太郎い年頃の身の慎みも何處へやら登り舘たる青樓の梯子い底く廣けれど間も高く世の中を狹くしたるも小米もゐ遙ひ果して彼所這所へ不義理の貧費も出來しにぞ小米も數度の身揚りに盡し合ふたる眞實い粹が身を喰ふ色競べ

余所に浮名も立花の柚の香をする軒前に置手拭して行むと夫と見るより小米い聲かけ「モシ蓼さんでい有ませんゝ思いせぶりゑ來たとも云ず茫然と門口ゐ立てゐるのは如何したのだねエ「思いせ振の閼すのといふ意氣ゐ世界に遊ばれるゐゝ最一度でもして見たいゝ自宅の前さへ忍んで來る果敢ない身に立つたも不圖しゑ事でおまへに馴染去年の春から二年越に身に附た物いいゝ迄もおく手の屈くだけ彼節道節と負債ゲ嵩むで此頃ぞい寄樓へも面の出されぬ時宜にまで成さけれども忘をぬいおまへの事嚴父も遊所へ茶の湯の稽古に出張る程の氣性もゐ眞かゝの野暮でもないが今私が是といふ產業もゐん次男の身で獨立とい言ながゝ私の爲ゑ相應ゐ借金もゐる藝者衆を女房にして下さんと發言さともせず言た所が迚も出來ない相談ゐ如何したゝ宜らふと思案に暮てゐる處へ先頃も鳥海嘶した通り此秋は如何有ても徵兵に出る適齢ゐ近日に下檢査を受ねばあらぬ事ゐ成さが知ての通りの病身だかゝ野營の天幕の中へ寢たりランドセルとか云ふ重い物と擔いで山路を駈廻つたりしていと迚も體が續くまいト云て免役と願ふ金もなければ皇國の爲に死ぬと歸めモウ檢査の日も近寄たれば暇乞にもるくと曾て種々話し度事もあれども多分の借財のある寄樓へ平氣ゐ面でもゐかれないから何處ゝ近所で目に立あい料理屋へでも誘引出して積る話しをしやうと思ふて先刻から此自宅の前を行つ戻りつしてゐたのさト云ば小米と莞爾らせ「弱い體の貴へ郎もゐモシ徵兵に出た上で先年中の鹿兒嶋のやうゐ一件でも始まつたら嘸お困りの事だゝふと軍の騷ぎを思ひ過し六年前ゑ亡あつたお父さんゲ大鹽の戰爭に出かけた夢を見て氣に憑つて〳〵塞いでゐる處であつたが幸ひに義母さんが今夜は留主の事だから奴輩の交際だと虛を言て目に立あい所へ所て一盃飲で何かの話しをしたり聞たりしやうじやアないゝ「然して呉れば都合が好が此近邊の料理屋でい萬一人に會たとき何ぞゝ体裁がよくあいがト暫時手を組み考へしのアノ溝の側の一の家と云ふ旅亭い警察署の向ふだけ出這入ゑ氣が詰るとて騷がしい客い來ず座敷も奇麗で庭も善く閑靜ゐ所ゝゝら彼節で一盃やりながら久し振でとは云もの、連立ても行まいから私い一足先へ行せ「ア、其方が都合がよいゝらおまへの好ゐ旨い下物と何ありと誂へて待てゐてれくれよと蓼太郎を出し遣り戸締をして衣服を着かへ隣家の女房い腹惡の親友ゐるば鍵をあづけ「今夜は仲間の交際で據ろゐく何處へぞか出かけましたとお母さんが歸つたら話して置て二龍さんが私を尋ねて來まーたゝ溝

の側の一の屋お居ますと極密と耳うちして跡から遊びに來ておくれと言傳をして下さいと頼みてころは出行ぬ

第三回

打水に濡て涼しき飛石を傳ひて足を爪立おがら入來る小米と樣側に腰うちかけて「チヽ辛度ト袂より出る汗拭ひを淨水鉢の冷水にてしめし雪恥かしき襟元を拭ひおのゞ女房に對ひ「姉はん今ばんい此二三日と實に酷い暑さで有ますねエト急しくいふも會たさに路を急ぎ〜光景は息切をにさへ知られたり主人も粹婦の果おれば長たらしき口誼い陳ず「途中と急いでおいで、

い嘸熱かつた事ざらふねば客樣も先刻らふゆ待兼の事あれバマア〜疾く二階へ行てゆ馴染の事あるは帶でも解て風をお入と云れて上る奥二階に下物二三種注文て多くい飲ぬ口おがら手持のあさに採る盃の通り所さへ夏の日の晩るより猶待れたる小米が膝に膝立直と鑒太郎お「先刻から首を長くーて大そうに待せられたせ酒と下物を前お並べて見て居るのも間が悪いから家婢に一ッ飲あいかと云ハ吾僧い無調法だと瞬然云をていよ〜手持がおくれ前が好も名誂へた水鮑が生温あるは色侍せられたよ驚いたせ「チヤ〜そんあに手間がとれまーたかへ私いあをかゝ取敢ず着物を着換てお隣の内儀に留守を頼み途中も駈て來たのゞいマア右も左も息つたに一口飲ーと下さいと猪口を採上げ二ッ三ッ重る話の端緒を開けば野暮お相談に遥るい愚の愚痴ぞか

〜稍有て蓼太郎い太い溜息をつきあがら「如何考へても下撿査の日も近寄た上からい迚も脱れる方もあー死ぬと諦めて出て見たら却て馴て樂よなるかも知をあんから思ひ切るより他に詮方もあいのさ入儡ーても二三ケ月立ば日曜にと遊歩に出られると云ふりゃ何も是限へ會れあんと云ふ理でもなーでァ〜塞ゲずよ氣を取立してモウ二三盃飲あくつてい何だかさつぱり氣ゲ滯あんと口にい云ゞ心勞い穂よ顯いる、花薄何ぞと人の問もせば露と答へて消ぬべき愁ひを夫と想像る小米い最ゞ涙よ暮れ「然う氣強くいお云ざけれども貴郎のやうあ柔弱い躰でい迚も兵隊には成れないかりゃお金を出して濟ひ事あら如何でもしやうと思ふけれども我儕も是までに大そうあ涙費て着る物までも曲た位だものを迚も算段の法は付ずさ殊よお母さんとあの通り繼しい中で飽迄も吾儕を喰物よする氣の邪見お人ざから他に翻談のしやうはあしさ寧の事に逃亡て一所に東京へでも行たあら如何か成ふかと思ひますい「女の狹い意から己を大事と思へばこそ然云て吳るのい嬉しいが徵兵の爲に遁亡をしていの第一は國の爲に濟ず茶人でい有けれども物堅い故親父ゲ今出奔でもしたと聞たら如何あよか腹を立て一生涯勘當は免すまい〜殊には馴染の人もあい東京へ行た處が資本人ゼの兵隊さへ勤められあい意口地あしに何商賣も出來るものか「イエ〜ろんなよ氣を落して考るからんけないがね此郷ばりり日い照き渡る世間に鬼いないと云ふ諺さへ有ますりゃ如何あ塢末へありとも住つて吾等い鬱妓なり家婢ぁりして如何に身を苦しめても宜から貴郎と一日でも添れさら鬼々しいお母さんに責られて强面い務をそると思へば苦みも却て樂みの種だりふと思ふよ「成程徵兵お出るゲ苦〜んと云ふ己一個の身に考へれば逃亡いさをないが兼て話しに聞てゐたおまへのお母さんの難物に一生躰を束縛さをてゐてはおまへも寔に憫然ざあァ「夫だらうらお互ひに此大拔と立退て如何ゥ工夫を附て見あんと思ふのさト泣咄さるゝを蓼太郎と憐と思ふ心よ氣を變て膝そり寄せ「道ならぬ不孝の罪は云ふやうもなけれども實におまへゞ其氣あら東京へ行て共稼ぎに奉公ありとして辛防し小家でも持るやうに成たり兩親への詫の所も又其折よと如何にか成ざらふから思ひ切て隨德寺とやらかさふりトへ云ふ物の東京へ出かけるにしても旅費がおし瀧船の下等へ乘さ處が二人ゞ十四圓出るうへよ横濱ゥ東京へ着ても十日や廿日の間ざの食料を見積ると少おくも三十圓とるくてい成あい譴ざが今夜お前よもる〜と會ふ散財の名殘と思つて實と親父の手許の金を拾

圓と持て來たが是でハ如何も始まらぬ話しゞ「ナヤ〳〵私も今迄ハ一所ゝ此地を脱るといふ了簡でハなかつたが斯いふ事を虫の知らせか内に有るお金と掻集めて私も十圓持て來たが合せて調度廿圓でハ逃亡ハひつかしからふね「サウヨ徹おくとも最う十圓足て三十圓おくてハ横濱迄着たいけで海岸で行斃きに成るより外に詮方は有まい「モウ僅に十圓の事ゞけれども鬼王の壺詞じやアなんが眼に貫ほどつらい物とないねエト二人が鬱悶相談中途に次の間の鼓戸の外より足あい路用の拾圓ハ姉さん私が貸ませうと云つゝ出るハ二龍あり

第四回

「誰かと思へば二龍さんお前は最前停車場へ客を送別て行との事であつたが何時の間ゝやら立戻り蓼さんとの話の始終を立聞してハ有たかエと云へば二龍は頭を振り「イエ〳〵私は如何お事を話てやら前後の事は一向に聞かぬんだが今爰に十圓の金が有るら都合がよいとか何とか云ふ野暮お話しゞ耳に這入り小米さんとは二三年姉妹も同様にしてゐた中の事でハあり如何にか切お及ぶおらと思ふ折節都合の好のハ今日東京へ御立の御客が停車場の待合で久しく最負にして遇たから發途際にハ浴衣の一ッも拵へて遣る積りを有たゞ急の立もゝ間ゝ合あいから是で如何でも氣に入た浴衣あり帷子あり買ふがよいとて十圓の紙幣を一枚貰ふたのハ思ひがけない贏物もゝ無おら迚も濟む事あれバ御用立るとアのも如何やら出過た所置なれば差向難儀の當座凌ぎ又よい事の有た時利に利を添て蓼さんのゝ馳走に成ませうと紙に捻りし十圓の紙幣と小米が手に渡せば「金錢の事ばりは眞實

の姉妹でも不義理に面を赤めあふ騒沱も世間に往々あるに二龍さんの侠氣は流石ゐ東京育ざけお客とはいへ蓼さんも金錢い自由に成ぬ次男の身おり私も亦おまへの爲ゐ成やうゐ事を盡しゑ覺ゑもおいゑ十圓と云ふ此お金を借てい如何も義理ゲ立ゐい足らぬおがらも二個して智惠を振つて見たならば如何か工面も出來やうから是ばつかりはと差戻せバ蓼太郎も面目ゐ氣ゑ「實に小米の云ゐ通り私もおまへが恩に着る程揚代を付たり其外の樞頭を上た覺ゑもゐし小米も赤の他人もゐ此ゐ惠みゐ預りつてい如何も心が濟おんもゐ是い倦まで御辭退ヲと押戻せば打笑ひ「然う二人とも四角詰ゑしく出られては十圓ばりのお金ゑ何だゐ廉ゲ立て出そにも出されず引れもせず座敷が白けて間ゐ悪いいね如斯ゐ辭退をすると云ふも人ゲ好過て氣の弱い二個が若や切迫て無分別ゐ淫雲い事でも去いせまいかを忍配するのも姉さん株の老妓もゐ私も故い東京から流を濯の古藝妓小米さん位の年齢ゑは思案の外の私通も一度や二度はして見ゑが是非此人と突詰ては淫雲い事も仕兼ゐいのが若い間の無分別癖を一いゑ通して仕舞バ酸も甘れも能く解て親にも苦勞と懸なくなるゲ小米さんい憫然ゐ幾毋の方から苦勞を懸け旦暮箸の上下しに口喧ましく喃々と言通されると近所の評判それも是も親の爲とは云へ夫の爲もある者なれバ遠慮をせずに此金は暫く預かるとしてれ置よ他の難儀を余所々々しく視てゐられぬのが私の一癖失敬ながら蓼さんも又此出世の有たうへ如何とも報酬の受やうも有ませうゐら此金は論おく納めて自然そのうち東京へでもゐ出の有た其時い芝濱松町貳丁目の五十番地に荒物渡世と云程ゐ立涙の店でとおけをども私の徒弟の金藏と云者が在まとゐゑ他ゐ便がゐいのなら其許へ導ねて寒公ゐり商法ゐりとも相談をして御覽ゐら善人もゐ如何か御世話も行屆かふかと思ひますから必ずともば導成されて二龍かゑ斯々云たとお話しを打明てしてばらふじまし上云バ小米い涙に昏「何から何迄姉さんのば忍切ゐば異見やら先の先まて考へて下さるば謝い如何云てよいやら言ゐ尽さをませね「戀者風情と世の中に賤める身ゐおまへのやうゐ忍の優しい情深い人は泥中の蓮とやら此蓼太郎が生あるうちい屹度御恩と報じませうが然いふ譯ゐゑ御辭退ヲさ此十圓を拜借して小米も直に足を拔き「蓼さんと御一所に瀧船へ乘て一走り「ア、是いしたり小米さん若東京へお出ゐらと云たい今の事ではゐい足を抜の逃亡そるのとんふ話しを朋輩ゲ默て見てゐられませうか此地で互ひに辛抱して表立ての女夫と成た暮句に東京見物ゐゐ

いでのあらば不知しふず滅多お事を大きお聲で言ず語らず此金を貸も借るも此座限り互ひに他言いしつてなしだよ「成はどさうでございました此御異見お從つて私も小米も是から一勉強して此大坂で勉る事よ去せせうかい深切が身に染て翌日も會れる事おがら今夜い何だか名殘が惜さきやうざね「實に藝さんのいふ通り翌日にも座敷で逢れるけをども眞の姉さんあればとて汲はぬおまへの心實に利口名殘が惜やれると泣と二龍は慰めて「朋輩妓も多い中よ殊更おまへは眞實の妹のやうに思いれて互ひよ盡す深切も又遠ざかる名殘の離宴サア〜一ッと採上て一順廻そ盃のひかげも孫て出ぬべき月影暗き宵の間に早疾々と暇を告げ涙お絞る袂を分ち藝太郎い小米を伴ひ濱車に乘じて神戸へ走り其翌日に出帆の貴龍丸に乗組て東京へ趣きつ二龍ご弟の家と聞く濱松町にて問合せしが同家の主人金藏い昨年病死せ〜うへに其女房には子もあければ粒々家財を取片付已が故郷ありと聞く安房の實家へ歸しが郡村の名は詳明ならぬと隣家の者の告る言に二人は差むき當惑し悲む木の下雨洩て何と涙華へ歸もされず涙の袖の汐垂て乾く間もおき芝浦の沖に漂ふ漁舟拍を絶たる如くよて進退て、よ谷りし困苦い想像れたり

第五回

東京芝太神宮の社内は所狹までに樓を並べし商人の店い稠密賑ひの中に聳し高樓い車屋といふ割烹舗の庭を隔てし下座敷よ一個の齒妓と差向ひ酒汲かはしてゐる客い京繪邊の新聞社の編輯長たる袖下星則常から惡き酒癖お十分醉を盡したれば舌も廻らぬ鄙聲よて「是ヤイ小米如何ーた者だ此袖下い庭下よ屈擂の新聞社の編輯長あればこそ大坂かふ遙々と府下へ出て來て喰ふにも困り腮の乾上る汝の兄の藝太郎を新聞社の小使ひお入て遣さればこそ三度の飯も喰續き殊に局長の憐憫を受て着古しの衣服ゐどを貰ふたい鍵ゲ屁蔭と思ふ此星則の周旋もゐだ其周旋の盡力も畢竟い汝お只顧惚ぬいてゐるうへの事兄が多分の世話にあれば之に酬る意いないか魚心あれば水心と世の諺よもいふ通り應と承知をしたがよい三絃ばくりで堅固く貫込むとんふい時代遅ひナト當世お了簡よ成て見やれと襟に手を掛て身近く引寄れば「アレ御戯談をおさりまするお成程貴君の仰しやる通り兄さんが一方あらず局長廣井道德樣の此最負よ成まそのも全く貴君の御蔭あれば如何やうな仰せありと聽ばあらぬ所おがら土地あれた東京の齒妓衆おらば不知まらず大坂から上つて來て顔も貰ない吾儕

輩がろんな猥褻な事をしてい御贔負にして下さるお客も落て此土間で酒者も出來ぬ時宜と成ば兄さんのみか吾儕迄ゞ活計の法も立おくるゐり此上貧苦を重ねるい眼に見ゑた事あるべ其事ばかりい勘辨して色氣おしに未永くゐ贔負にして下さりまじと柳に受て涙ぐむ顔を飽まで覗き込み「サア其通れ口上い是迄幾度も聞果たゞ思いせ振も程が有る勵ともすれば懷中へ顔を入てい鬱憂で見せる憂ひの景狀も亦千金死ゞ枉若も及ばぬ標致と此星朗にい見ゑるい二東京へ來て種々お難儀を重ねた樂句もゑ衣服ゑんどの身支度も充分に出來ぬ所から芝の藝者に出た者の此萬しい容貌で立派お衣裝を四五枝着飾り柳橋か新橋の本場へ出たら大層花走て小使をしてゐる兄さまが小商ひでもする程の立身出世い知れてあれゞ此星朗が望ゞ處ゝ身を任せてさへ呉たおら芝を引せて新橋ありと柳橋ありと隨意お所へ獨立にして出さしてやらふと思つてゐる僕ゞ心の底を汲み忌と云ゞ如何されても默つてゐやれと抱つき縮緬の袖で覆ふ口へ鬱氣で臭い息のする夜具の袖ほどある唇を摺付られる腹立しさに我を忘れて星朗が髭ぞりけお腮お手をかけ力を極めて突戻し「エヽモウ氣障あろんお事い大嫌ひなれゞこそ未熟おがらも三味線ばかりで立通す氣の吾等もゑゐ贔負に成さるい嬉しいゞ其忌らしい思召ゞ有おらゞ此後とも決して搏ふて下さりますなと強面云ゝ星朗い膝立直して眼に角たて「何だ〳〵此寳婦めごの氣障お事い大嫌ひだと酒に酔た客の言を一々

氣障だの嫌ひざのと吐露る程の事あらば何故藝者に成たのだ殊更に此星朗い尋常一様の客と違ひ現在の兄さでゞ糊口に有ついた大恩人のいふ事を聽ぬのみか失敬至極な其挙動い決して堪忍いたさぬと人我に強面けれバ我又人ゑつらきの譬へ僕い飽まで勸懲の教訓主義に筆い採ど不良ぬ者い充分に其非を擧て筆誅し諷諫するが義務あれば良しらざる風聞い直地に載て其悪行を世に公布するのみならず遠ゐい廣い地球の間にも居ゑゝまをぬ迄にそるも編輯長の權にあれば新製の寶藥新舗の料理新刻の書に至るまで賞て澤山寶せるも誹謗して失敗させるのも此星朗が筆一本の働きにある事さ夫故にこそ諸方より賄賂といふ理でいあいが寶出す物い初穂を贈ふれ又内々の失策を新聞紙上に載ふれては迷惑だと思ふ奴等い自宅へ参つて夫々の心配にさへ預る身が大坂上りの安藝妓昔年で云ば上方才六西も東も黒暗ゐ駈出し熱者の分際で世にも名高き先生に能も恥をかゝせたゐ上い大臣參議より下い俳優幇間まで袖下と云ふ名を聞てい望みもせぬに招待して馳走にもあり四季折々の贈物さへそる程の編輯長の恩と譽にて報じるゐらバ後日ゐ必ず吼面をかゝして見せうと怒猛りて突と立上り吸物膳を蹴反せバ汁も刺肉も口取も小米が蹤に散亂し流るゝ事い縮緬の色を失ふばかりあり此物音に驚きて馳來りたる車屋の女房始め家婢等まで事の始末い問糺さず强て小米に詫入らせ口を揃へて星朗を頻ゑ嫌し宿ひをと愚知短才の星朗い我意に驕りて止るも聽ず袂を拂ふて歸りしい苦々しく不見えにける

第六回

寔や佞酒が人を誣る三寸の舌い三尺の劍よりも鋭く新聞記者が需て人を誹毀する筆い一發の銃砲より迅く走りて世人の眼に觸る耳に達を其損害ころ恐るべし爾バ袖下星郎い智もあく才もあき俗人あゞら僅に小説草雙紙の類ひを好める所より京傳馬琴が戯作を喜び貸本屋學問ゑ二三の臆筆を識て自ら天下の博識と誇り僥倖に新聞記者の端ゑ列りて編輯長ゑ著名せしより案山子と知らぬ燕雀が大鵬に比ゑ局長の出社ゐき日の雜報にい我が愛する者を飽まで賞し憎に適いぬ者い譏す其筆頭の毒悪なる刃を以て人を弑るに禍增罷を重妻重ねて夫と言離き小米い良人の藥太郎を兄と偽り貧苦の始末を星朗に物語しと奇貨として星朗い恩がまゝしく新聞社の小使ひを周旋せしを鼻に懸け日曜毎に芝邊の割烹店に來りてい小米を招きて經頭も與へず爭で憎ゐ從いせむと挑ひを聽ぬ腹立より小米が事に種々と悪名をつけ

新聞紙上に掲げて迷惑を屢々懸る而已あらず實直律義を務めゐる蓼太郎を故もなく放逐せんと計りしが同社の局長廣井道德い蓼太郎が正直なるを深く憐み不便を加へて事故もなく暇を出さねば我が雇人あらざるもの此事ばかりい星朗が憎の儘に進退さをねを只願妬く思ふのみ勢ひ斯の如くあるを小米い無根の醜行を日々の如く揭らるれど其實夫の蓼太郎が雇いれてゐる新聞社なれば取消を求むる事もならねば告訴も出來ぬ所より他人い是を興として芝神明の境内に幟を並べし茶店楊弓場の地廻りと稱さるゝ若者等が四五名寄合ひ「竹さん何と聞あさつたか近頃この神明前へ出てい新妓の花走者で小米とかいふ奴い余程惡い女と見て此頃新聞に度々出される不都合の中にも廿錢でも三十錢でも速應來で轉ぶゆゑ私生兒と度々孕み内々堕胎した事もあり未だ其上に安賣の黴毒が顯腫て大切な股ぐらが腐つてゐるといふ話しだが新聞記者といふ者い皆も氣の付ぬ所まで能く探訪が届いた者だね「イヤそれに就て不審といふい彼小米といふ者い大坂上りで中々な上玉で有ながら此山の手にゐる而已ならず地獄同樣の安賣を誰も買ふ人のないといふのい全く瘡毒で腐つてゐるゆゑ起居に膿の匂ひがして座敷へ聘でも其臭氣で胸が惡く成といふ事が新聞に出てゐたので判然譯が分つたのさ「松さんと竹さんの御話し位ゐな事あらば標致あめんじて買れもするが今日の新聞を見て愛想の盡たは内々少し手長猿で小米に應療をさせた客い紙入の楮紙に不足ゞ出來さり銀の煙管や珊瑚珠の緒〆の付た莨入の紛失した事も度々

あるとよ「チヤ〳〵マア怪し辛ない吾倆なんぞい藝妓衆より卑い楊弓屋の娘ですが十銭や廿銭の御祝持次第で速應來あんどい實に驚き桃の木さねエまさ其上に手長猿とい風儀の悪い藝者だねエ「お梅さんさへ驚く程ざから奪れた客い愕然して二度と再度聘あい筈さね「竹さん澤山ろんゐ事を仰しやれよお梅さんさへとい失敬極るねエ「成程これい恐入たか君も大ろうあ口をきくあゝ新聞に出されあい樣ゑ用心をしよ「イヤ小米さんでい有まいート悪い噂い千里を走り芝邊の茶屋料理屋にて小米と招ものゐりければ盛裏手裡とかへすが如く昨日迄い花走奴と呼れし墨盛引かへて世い賑いしき歳の瀬を越るに離き貧しさに幾夜も挽く茶博多の帶も質屋へ流をの身税の未納も重りて遂ゐ藝妓の務さへ奈良の春日の鹿あふで憂を三笠の山蔭に啼て妻恋ふ小米夫婦が斯い困苦ゑ陥入しも恋慕の闇に輝めきて眼と照す星朗が遺恨に出る禍ひも雑報記者の奸計ゐ依ば凡江湖の操觚者さる者他人の履歴を記すに臨まず注意に注意を加ふべさあれ

第七回

瀟笛の聲の近く響くに發奮の時間を計る停車場より一町余り西に當りて芝口の裏とい云ど表にい生澁で塗し板塀の外を二重に圍ふたる竹と丸太の柵間町格子造りも拭込て石の敲の出入口二階に屆く桐梧の梢も高き學名ある靜岡縣の士族にて廣井道德と表札を掲げし後の勝手口の縄簾を押あげて「へエゆ免下さいまし〻ト音ゐふ聲に家婢が立出「チヤ〳〵誰かと思ふたら新聞會社のゆ小使ひの鑿さんか毎もおふモッ社も引て旦那樣も御歸宅が有る時分ざに何の御用と問懸ふをて鑿太郎い小包と取出し「へイ今日い社のゆ引から局長樣いゆ同僚うちと上野の夕櫻を見あがゐ精養軒へゆ夜食を上りゐお出といふ事ゐゐゆ弁當売を持て參りましたトいふ聲を納戸にて早く洩聞く道德の妻のお百合が走り出「チヽそれい〳〵大きに御苦勞弁當売い受取ましたが今夜旦那に是非會たいと仰しやつての御客もあをゆ夜更になる程お手間もとれまいから御迎ひの車夫を言付るゐも及ぶまい夫い然うと鑿太郎どんい何處か氣合ひても悪いのか常と變つた面の色如何やら物のいひ樣迄も元氣のゐいといふ塀梅い風でも引てゐ但しい又格別に苦勞ゐ成る事でも有かと問懸られて鑿太郎い熟々とお百合の顔と打守り「常と變つて元氣がおく鑿いた樣に見ゆまするか扨も〳〵御發明ゐ御新造樣でござりまず十日以來湯にも遐入ゑ髭も剃ねゆ物臭く元氣が落て見ゆまず筈當月の

初旬から引た風が抜かねて頭痛が致して成ませぬが今日ハモウ大分快方ありましと其御尋を受るに就ても局長様を始めとして貴嬢様迄がお優しく蓼太郎よ〳〵と一方あらず御目を懸られ召物迄を頂きまして春の寒さも凌ぎましたゞ此蓼太郎を其始め會社へ入て下されゝ袖下様とハ雪と墨ト云かけて忍づさ「イヤ何墨と筆とと手に採て世の中の人の善惡を御記おされる程あつて廣井の旦那ハ想像の有御方さと社中の評判御新造様迄が病氣をハ尋下さる程もあ思召の篤い處ハ此蓼太郎が身に採て死でも忘をは致しませぬ人間といふ者ハ實に老少不定とやらを斯うして毎日ハ弁當の上下しを致してゐても何時ゝ無常の風ゝ當れば ハ暇乞をせねバ成ぬハ誰が上にも有る事おゞら不斗した心得違ひゝら女を連て立退た故郷の親へハ不孝を重ね二ッゝハ皇國の爲の御用に立べき此體を逃隱れた天罰は如何でも受ねば成ますまいゝら若此塞胃が追々に差重つて蓼太郎が死でも致した事あらバコリヤ面白い新聞種ざと袖下様が御存知の始末を書ふと仰しやりませうが聞う致せバ兩親の名迄を世間お賣弘め恥の上の愧不孝の上の不孝あれバ万々一 私 が病死を致しました迚も新聞へハ出ぬやうゝ局長の旦那様より袖下様へハ話しを成されて下さります様にとお序お願りあからハ新造様から旦那様へハ願ひあゝとて下さりませと話しあからゝ破亂々々と溢す涙を袂より出す手拭にて板の間を拭て笑ひに打紛らし「ハ、、、、是ハ〳〵途方もない馬鹿々々しいお話しに實が入て時を遷しましゝ人ハ命が有バこそ苦みもあり樂みもあるといふもの死ぬなぞゝいふお話しハ延喜のわるい鶴龜〳〵サア〳〵早く歸つたうへ熱い粥あと喰まして一汗とつたゝ明日は快く成ませうドレ粥と立上るとお百合ハ不審と聞とがめ「老少不定といふ事ハ珍ら〳〵もあい譬へあがゝ今日に限つて長々しい話しの末に万一の事が有さら新聞に載あいやうゝして呉とハ如何やら氣に成る問ず語り足下も他の家業と違ひ新聞社の小使ひあれば命を魔末にせぬ事ハ百も承知であらふけれど風邪ハ百病の原とゐいへバ必ず大事に養生して務に怠らぬがよいぞや旦那が宅ゝお在あら又ハ相談もして見やうが今ハ留守の事あればト云かけて箱火鉢の曳出しより壹圓紙幣貳枚を出して紙に捻り「是ハ寒に微だが風邪を引たといふお見舞牛肉ありと蕎麥ありと熱い物でも食てお臥よと渡せば採て押頂き「毎度あがら如此ゐ御心遣ひお預りましてハ相濟ませぬといふ物の返上するも却て失禮あれバ思食に從ひまして好物な品を澤山に調へまするでおざりませう旦那様

ゐも宜敷と云つゝ立て門を出で名殘惜氣に廣井が家を見返り〳〵新網の家路をさして返りぬ

第八回

「死もしさいが別れがつらい主が出世の妨あらば」と切なる情を穿得〳〵都々一に採る三味線も賣拂ひたる其上に藍妓渡世の鑑札も返納すれば於の字名のお米い憐れ縮緬の昨日の晴着引換て繼合せたる襤褸の衣に油染れど油氣の艶い拔たる束髮解ゐ說れぬ身の憂さに貧家の妻と形振も落魄果たる其原い叶いぬ戀の遺恨に因りあらぬ所業を新聞に載て最負の客先や料理屋待合ゐんぢまでゐ愛想を盡せて營業の成難き迄に妨ぐるい暗に閃めく星朗が所爲と〳〵知れど表向き兄とよび做す蓼太郎が社ゐ使いる、緣あれば寃を辨駁由もあく遂ゑ廢業したりしがお米ゞ稼ぎぬ身と成てい蓼太郎が月々に得る給料い僅少あれば夫婦が露の命さへ繋ぎ兼さる捨小舟波のまゝ〳〵漂ひて松濱町ゑも住居りね苦を數寐のそれあらで僅に風雨を凌ぐ迄ゐる新網の裏長屋へ引移しより加之へてお米い持病の血の道に枕も上得ぜ惱み伏し重ねし衣服も一重賣り二ツ減して日々の活計ゑ充れど此末い如何あり果る梅の實の隣家の庭より差出て落るを拾ふ人もあり酸味を好ひは惡疽の萌か夫婦ふたりの活計さへ立難かるを此上に兒を設けゐば三人の親子一所ゑ餓死の外ゐ思慮も情あり因果同士の寄合て共ゐ歎きを見ひよりい寧此身を淵河に沈めゐとして〳〵まふたら蓼太郎が獨身ゑて意易く世と送るが又勸宮の詫が通ふか左に右にも吾儕さへ世に亡き者と成るゐらば再び世ゐも出るべき若ん盛を愚愛に迷ふて貧苦を重ねしうへ夫婦が餓死するよりも獨死ぬころ良人の爲と思ひ切ぜも此儕に別るゝなば死ぬるとも盡ぬ恨に往生まゝ上今宵良人の歸を待ち夫とゐなしに强面も暇乞して別れひと意を決〳〵して一通の書置さへも遺し留めぜ歎きを見せて曉られしと重き枕を雄々しくも持上て俟や松山の波も越さひと契りさる想ひは同じ蓼太郎も我だにあくい女房お米が星朗の意ゐ從ひ恍の塵を拂いぬ迄も未ゞ年若き事ゐれば何國の人かの妻妾と成て出世もするべきを男を云るゝ甲斐もあり蓼太郎のあをばころ此大病に醫療もあらず布團も薄き夫婦の緣も今日迄と思ひ切この芝浦の波間へ身を投苦勞を懸た兩親へ詫とせばやと切逼し覺期の涙と見せまじと愉快氣に三合入の德利を提て內に入り「お米や今歸つて來たよ」「今夜い大ろうに遇かつたから如何おしかと案事てゐたよ」「今日い局長廣井さんの

御宅でお夜食の御馳走にあり種々お話しの出た中ゝ些可賀な事が有さから久し振りの祝ひ酒に途中で一杯買て來たが少しでも氣分が快れゝ起て一盃飲ないかト云ゝお米ゝ膝を進め「心祝ひをする程の可賀の話しとゝ何ぞか知らぬが御目出度から起て一盃飲ませうが目出度事とは如何したのだエ「斯う發言たら何どやら氣まずい樣に思ふだらふが廣井樣へお出入をする或人が周旋で已を養子ゝ貰ひ度といふ好い口があるに付ては二個して此通り貧乏をしてゐても先に斯といふ目途もないから已と養子に行ふかと思つて大概相談も極て來た斯いふ折を僥倖ゝ別れた方がお互ひの便利に却て成るぞらふよ「

チヤ〳〵夫ゝ結構ざねエろれに就てはよく似た話しも有る時は有る物で吾儕のやう奇者だけれども譬へゝもいふ緣は異なもの先達てから此長屋へ毎日見る紙屑買が嫁ゝ行く氣があるあらゝ金杉邊の或る士族の所へ世話をして遣らふと親切に云ふたれゝ吾儕も其所へ嫁に行て今一度花を咲せて見やうと思ふ了簡だかト今夜を限りゝ思ひ切て夫婦別れを去ませうト云合さねと諸共に嘗なく云て亡さ跡に身を立させんと思ひければ梦太郎ゝ小膝を打「成程是ゝお互ひに斷ふてもない僥倖夫婦の緣も今日限ゝ瞬然と切るとして他家へ緣付く前祝ひと名殘を兼て心よくサア〳〵一盃やらかさふと披細りゝる身ゝ似合しき貧乏徳利を其儘ゝ火鉢へ入て温める袖も濕り〳〵鳴乾魚を焙りて毀たる皿ゝのせ涙隱ーて莞爾と笑ひ「婚禮ゝよりば女から飲で瓦夫へ差べきだが是が別れの離盃ゝ

れば己から飲でおまへゝ差せ「ほんに浮世い夢とやら今日迄い百万年の末迄もと思ふたれど貴郎も蟹の口があり吾儕も嫁に行く先が計らず出來たい夢のやうお嬉しゝ目出度事あれば長い間だふ盞し合ふた苦勞を忘れゝ機嫌よく笑ふて奇麗に別をやうねェ「いか様お米のいふ通り大坂を立て以來兎角貧苦に責ゝをて笑ふた事もあかつたゞ是が名殘の盃なれば久〳〵振で笑いふかと面に笑い含めども夫婦ゲ面の見とさめと思へば持し盃の手も震いを て意にい絶入るばかり歎きしが斯てい果ゝと雄々しくもお米い帶を結ひ直ー「何時迄斯してゐたとても餘波の盡るやういおければ吾儕い今日の嬉し紛をに病氣もさつぱり直つされゞ紙屑屋の老爺さんの所へ鳥渡行て來ますと立を暫時と引留て「汝が歸つて來る迄にい已も出かける積りだからわつけおいが此限に別れて後手に行く屈に隨分躰を大切にするゲよいせと眞實の言葉を跡に聞おして病衰へたる脚踏しめ力おく〳〵立出る戸口を磴と蹴切て袂を口に銜ひたる死出の首途のお米が想ひい千萬無量の悲みあるべし

第九回

今宵今世の名殘ゞと言合さねゞ夫婦とも知らず御られぬ蓼太郎いお米ゲ歸らぬ其間に嬉く走て身に沈み見苦しさ死躰を人ゝ見せじと思ひにければ慈に書置をも遺さぬお米ゲ再嫁の入費の足にもがあと先刻廣井ゞの妻のお百合より惠まれたる貳圓の紙幣と持合せし半圓の札とを封じて其上に名殘の酒宴の着料お米ゼのへと書く文字も涙に入染ひ筐の鳥跡薄い夫婦が鴛鴦の夢の契の果敢あくも破蒲團の上ゝ坐し四隣へ聲を忍び書に絶入るばかり悲歎しが嗚呼我あがら愚痴ありさ後れてお米が歸り來らば嚇々別れ憂からむゞ縫し裾を掻合せ尻はせ織て一散に走出ひどせし折うら黒さ帽子に襟巻深く面を包し一個の男が傾く軒の下に立ずみ車夫が以たる提灯にて表札を覗ひと突出す機械に面を見合せて「ウム小使ひの蓼太郎か「ヤア局長の廣井様か何の御用で斯お所へ「チ、其用い足下の宅をわさ〳〵尋ねゝ來たれゞも夜更て寇お知憎さに一戸毎に問口の家札を讀でゐる所さ「左樣な事でござりましたか併しあがら局長樣が御自身に只今おろ御出のあるとい何ともはや不審ゐ事で御座りまも御用が有おゝば使ひを下さを次第直お是かゝ上りまそにト出後れたる蓼太郎の面を熟々うち讀り「イヤ何小使ひ僕が自身に來たとても何も驚く事いおい些話し度事もあれゞ精養軒ゝゝと反ると直お取物も取敢ず深夜に參つた其仕細い路次内おりとも往來に立おがら話

しも出來ねば足下の内へ通してくりやれ「夫いお易い事おきど疊さへあい此破屋は衣服が穢れまして」ト云かけて戸外へ出車夫が預る膝懸の敷物を持來り「如何ぞお上り遊ばしましとも了兼た此体あれど夜露凌ぎよマア〳〵是へ「イヤイヤ決して苦しくあいト様に上りて四邊を見廻し腰指の莨入を拔出して火鉢を引寄せ竹箸採て灰掻おらし「足下い何り騒然と夜更て何處へ行積りだト問れて「ハッと往詰る筈に道徳膝摺よせ「僕が當身に

参つた用い足下も兼て知る通り本社の新聞も創業よりい數年間おらねど日に增て摺高も殖幸ひよして三萬余枚賣出す程に成たをば今度紙面を改正して一層大きくするに付ては小使おぐら參太郎い實直よ務る者も名僕が見拔て會計の助員に拔抽るに付てい不承知も有まん〳〵が一應内意を聞さに態々尋ねて參つたが今日にてい盛大を極めて各社に立優る本社とても其創めハ僅に千か二千程の微々たる物ゲ斯うあるも持主始めの勉強と耐忍に

因て今日迄保ちし故ふ社も隆ゑど是が二千か三千より賣捌ぬときもウ是迄ど短慮に思ひ詰たあゝ瞬間に閉店して世の胡慮とおるい必定ことを比例て云ふあら新聞社の持主い隠居の両親とも譬ふべく編輯の局長と會計長い隊いで働く戸主夫婦其他い子供や弟ども一家和合とすればこそ其産業も繁昌すきバ賣ぬ貧苦に短氣を起し無分別ゑ戸主夫婦が筆も揮いず十六盤も採ぶねバ自滅を招く所を有たゞ足下も今年で足かけ二年新聞社にゐる以上い人も器械の運轉と同じ様に怠りおく働いてゐさへすれば自然と両面菊全しゑ新聞紙が出來るものを翌日の配達の間に合ふまいと急いで騒げバ急ぐほど紙も命も摺破れの多分に出來るのみおゝず發輝しゐい印刷と世ゑ笑われるも急ぐもゐ飽滿ゐ活字の植違ひ逆さ事をしたなゝバ社長に譬へる親々ゑ歎きをかけるゐ墨汁の加減の未だ〳〵煉ゐい若氣の至り其不都合を社中の者にさせぬい一社を擔任て取締をする道徳が職掌上にゐる事なれば必ど短氣を起さゞと明日よりい從來の襤褸を脱換て縞の羽織の手代氣ゐ成て勉強してくりやれト云かけて手を拍鳴せば車に乘て持來りし更紗の包を出す車夫に解せて惠ひ二子織小袖に羽織とり添て綿さへ厚き廣井が恩に死を止りし蓼太郎は嬉し涙にうち昏て物をも云ず首を垂れ伏翔みてぞゐたりける

第十回

斯る折から外の方に「旅処じゃ〳〵と云ゐがら車を下す宵のして廣井が妻はお米を伴ひ進み凡るゐど蓼太郎と再度愕然仰天し「旅ゑお米如何ゐふ譯で奥樹とは一所ゐと云つゝ不審と嘯ざりけり當下廣井が妻お百合と其人に會釋し席に就て「先刻おまへが御辨當の荒を返しに來た時に人と老少不定とやらと云て歸つた容貌の所しさ若死ぬ覺期でゐとせぬかと御歸を待兼て旦那にお話しゃさらそんゐゝ今から一所に行ふと遽に二挺の車を急がせ將監橋まで來かゝつた時欄干に身を寄かけて念佛と云ふ女こそ正しく身投と思ふたから車夫に止めさせ仔細を尋ね僅な楮幣でも惠むざうへ自宅へ送つて遣ふと思へどおまへの事が氣懸りもゐ旦那の車を先へ走らせ吾儕と跡へ引返り身を投ねバ成ぬと云ふ女の話しを悉く聞バ思ひがけゐい蓼太郎の女房のお米と云ふ者だと始めて聞て驚愕し危ふひ所と助けたも不思議の縁と夫らして過ふたと今夜が始めてゐゞら段々と素性を聞バ此お米さんと大坂の與力米倉源吾といふ人の娘ゑさふに御座りまもと聞て道徳小豫とうち「フム偖とお米と大坂與

西米倉氏の長女ありしが孰道德が實家の父も大坂の奥刀あて蒔森嘉一郎と稱る米倉氏と同僚にて道德も未だ十二三にて關東へ下り廣井家の養子と成ぬそれ迄い米倉氏に讀書と授かり厚く教示を受さをたこそ今筆硯に從事して社務を擔當そる身と成しも米倉師の蔭あれば疾にも舊恩に報ふべきを知らぬ事とて疎緣に打過夫婦が貧苦を助けざりしい殘念至極の事といへ今日計らずも蓼太郎が死べき覺期と今百合が告に遇いて憫然に思ひ身投の婦人を救ふためにお百合を跡の車に殘し先へ走つて來た折から門を出りける蓼太郎ゲ面色さへも蒼ざめて話の前後も揃ハぬ正しく必死の覺期と曉り夫といふおしに新聞紙に擬へて種々異見を加へ死を止めしにお米も又言合さねど身を捨て其夫の身をば立させんと思ふ實意の符合せしと道德夫婦が計らずも一人宛救ふさい米倉殿と師弟の緣の盡ぬ互ひの僥倖にて寔ふ危ふい所で有さと語ればお百合も喜びて「然ういふ緣があいとても篤實な所ゑ目を注て最貧に思ふ蓼太郎夫婦の事あふ且那も吾儕も切と盡して救ひ度と思ふ所ゑ素性を聞ば昔旦那の父實父の同役ある先生の娘事とあるからえい翌日から直ゑ内へ引とり車の上で途々も話しを聞た大阪の南の新地の養母の所や蓼さんの御實父の許へも旦那の方から仲裁を入を詫て事あく夫婦にさせやう今からいお米さん吾儕と姉とも妹とも思ふて隔慮いせぬがよいト眞實見して信やかに云ばお米は雀躍して大阪與力の娘の果と仰しやれていお恥かしいが廣井樣も吾儕も同じ與動の事が寄合ふて嬉しい御面を會せるといふ前兆かして蓼さんと一所に成る其日の夢に大盥の戰騷ぎに出つた父源吾が働いて居る夢の魔際濟の側の一の屋といふ侍合で蓼さんと泣て話しをしてゐる處へ朋輩藝妓の二龍さんが東京へ立つ御客を送りて櫛頭に貴ふた十圓札を借て來たのは去年の秋ト聞て道德指折算へ「そんなら去年の殘暑を避に有馬の温泉から大坂を見物かたゝ一月餘り逗留した其間だ常に贔負にした二龍と四五名の藝妓に送ふれ停車場ゑてゐれゝに渡した金が廻りゝて二個が當地へ來る旅費に成たといふも不思議ゑ因緣其恩金も二龍の許へ僕から返金致さふから唯何事も懸念あく蓼太郎ゑい明日より社の會計を負擔して勉强されよと慰ひれば「不思議ゑ御緣に繋れて何ゝら何沱洩る事なく厚い御世話に成さして會計の添役に迄御撰擧下さるのい難有いおざりますれど左樣に遽に出世をしてい他の猜や編輯長の思召も何とやらと氣遣へば昔をふり「イヤ其心配ゑい及ばぬ編輯長の袖下い風聞耳からぬ行ひあるは今日社主を始とし上

野の花見に事よせて精養軒へ寄合しうへ社中の規則の改革を議し併ゐ袖下星朗を明日呉り退社さすれゞ社中の風波も治つて彌々盛大なるべけれゞ御夫婦ゐゝ明日中ゐ家を仕舞ふて拙宅へ當分同居致されよ僕も又々當夏ゝ京都へ参る用向あれゞ其節坂地へ趣きて二人が道亡の詫をも整へ諸事都合よく取計らいんと云つゝ起て廣井夫婦ゲ戸口へ出れば春の夜の早明渡る袖が浦に映る朝日の大潮の夢の餘波の物語を濃華の旅寐の戯れゐ筆のまに〳〵編畢

ぬ

（餘波の大潮大尾）

本誌第四輯噂之杜鵑花第壹回同第四回同第十二回の挿畫組附の際位置を誤り甚だ見苦敷疎漏の段茲に鳴謝す

印刷部

柳亭叢書第五輯終

明治十六年四月十二日御届
明治十六年十月廿一日出版
柳亭種彦著

編輯人　高島藍泉
東京京橋區南鍋町貳丁目三番地
滋賀縣士族

出版人　田中貞吉
京都府上京區第三拾組
下本能寺前町拾壱番戸

西京寺町通御池下ル
駿々堂本店
駿々堂印

東京京橋區三十間堀町貳丁目
東京發兌元　繪入自由出版社
出版社印

大坂備後町四丁目
大坂特約發兌元　岡島支店
岡島支店

東京本挽丁　萬字堂本店
大津西今藏町　駿々堂支店
特別賣捌所　大坂唐物町　兎屋支店
近江深川村　鵜飼兵太郎
東京通三丁目　小林鉄次郎

各地同盟發兌書肆

大坂
前川支店　錦喜本店　華井卯助　三益堂　梅原龜七　華元文昌堂　吉岡平助　勝間次郎　静雲堂　福田助次郎　野村三書堂　順慶堂　辻岡文助　九春社　博文堂　鴻盛社　福字堂

東京
彦根新々堂　名古屋石坂舍　石の巻三陸屋利兵衛　廣嶋早速社　知新堂　高山中專助　知澤本駒吉　長濱吉日作平　長岡大橋新太郎　多度津一貫舍　殿ヶ原吉田元治郎　豐橋錦々社　丹波好文堂　伊賀貴田源藏　福崎淡月堂　中津重木舍　大和坂田一郎　敦賀井波書店　堺惠盛舍　金澤雲根堂　和歌山津田源兵衛　仙臺木村文助

横濱
萬字屋孫次郎　伊勢屋梅藏

神戸
弘譲舍　弘榮舍　日弘堂　高橋政吉

大津
澤一二郎　太田支店

宇田川文海校正　旭亭芳峯著

孝子 復讐實錄　全一冊　近刻

右い文政年中相州小田原の城主大久保加賀守の家臣向井蹕右衛門の組下足輕に淺田唯助と呼ふ者ありて箱根の關所在番中同僚成瀧萬助と云へる者の爲に暗殺せられしを發端唯助の養子鉄造實子紋二郎の両人父の讐を復さんと萬助の踪跡を尋ね艱難辛苦よ耐て五年の春秋を經終に常州水府よ於て讐敵を討留るを大尾とあし前後七年の事跡孝子の志操人をして感歎ゟ堪へさらしむるの譚あれい發兌の日を待つて御購覽あらん事を希ふ

宇田川文海校正　旭亭芳峯著

新編蹟籬の蕣花　全一冊　頗美本　近刻

宇田川文海校正　繪入美本　初編發兌

天明騒動 伏見義民傳　定價十五錢　郵税四錢

右い有名なる文珠九助其他伏見義民等の事蹟を評細著したる傳記にして民權家の必讀すべき繪入美本あり

やと、たもとくもねのひとこと　全二冊讀切

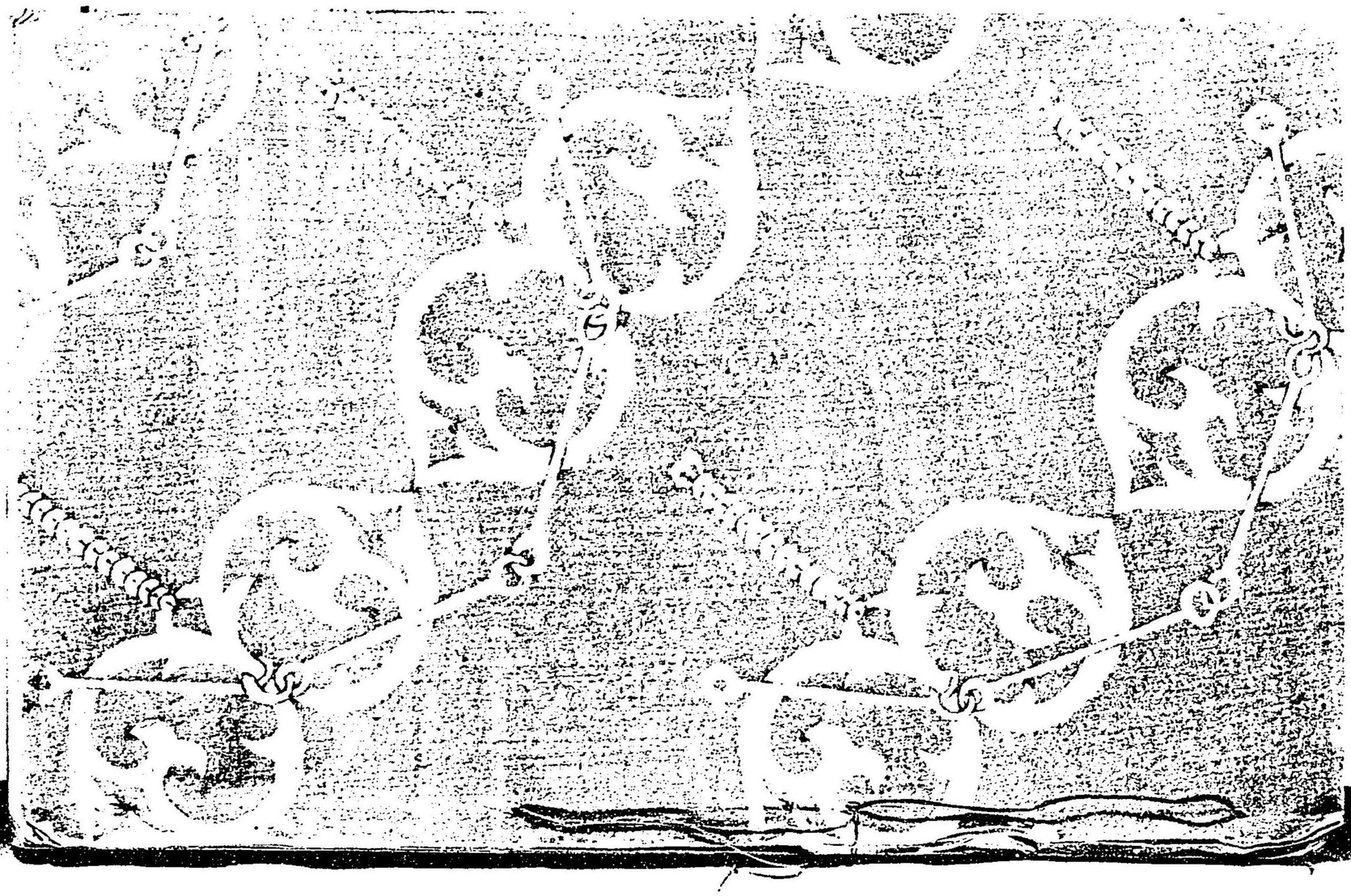
人情清談 蜀魂雲井一聲　價冊六錢　郵税八錢

凝香花妹稿　林兄弟報讐記　自初編至三編　近刻

忠義雙鑑　岸田俊伊呂波タトヘ　席上演說　初編　近刻

英國ヂユールスベルヂ氏原著　渡邊義方校正　○第壹編○日本井上勤譯述　本日出板○亞非利加内地卅五日間　毎月二編宛出版　空中旅行

全六冊石板密畫入壹冊定價金廿錢郵税四錢



十43

駿下
堂樟